

下之郷遺跡確認調査報告書 VI

— 第52・53・54次調査報告書 —

平成22年3月

滋賀県守山市教育委員会



第 53 次調査 調査風景

序 文

弥生時代、今から 2200 年以上も前の守山の人々は、掘立柱の建物をたくさん作り、大きくて丸い形をしたムラを営んでいました。周りには大きな濠が掘られ、外敵の侵入や水害からムラを守っていたそうです。

ここでの生活は水道も水洗トイレもない、電気や蛍光灯もない、寒くて、暗くて、ひもじい生活だったのかもしれませんが。しかし、ゆったりとした時間はあった。そして、豊かな自然に恵まれて、大地を耕し、魚を捕まえ、ものづくりの楽しさを存分に味わっていたことが遺跡の調査成果からうかがえます。

時は流れ、2200 年の時間が経ち、現代の社会はすっかり変わってしまいました。人々は高層住宅やマンションに住まい、それぞれの家には冷蔵庫、クーラー、全自動洗濯機、テレビ、パソコンなどがあって、あらゆる物が手に入る時代へとなくなってきました。モノが豊かになり、技術は発達し、人々の生活は本当に便利になったように思えます。

しかし、本物の豊かさとは何かと歴史の中で問い直してみると、弥生時代には現代にも引けをとらない文化があったのではないかと思います。

下之郷の弥生集落跡は、貴重な文化や過去の記憶をまるごと包蔵している重要な遺跡です。今回は平成 15 年度に調査をした成果を報告するものですが、今後も調査を進めるとともに整備活用を推進し、これからのまちづくりや教育活動、未来政策にも生かしていくことが大事だと切に感じております。本書を読んで頂き、ご批判、ご教示を賜れば幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に、ご理解とご協力をいただきました地元下之郷町の方々、ならびに関係機関に対して厚くお礼を申し上げます。

平成二十二年三月

守山市教育委員会

教育長 上路 博

例 言

1. 本報告書は、平成 15 年度の国宝重要文化財等保存整備費補助金で実施した重要遺跡範囲確認調査について、平成 21 年度に同事業補助金で調査報告書を作成したものである。
2. 現地調査および整理調査は守山市教育委員会で実施した。
3. 調査体制は以下のとおりで実施した。

(平成 15 年度)

教 育 長	山 川 芳志郎
教 育 部 長	津 田 重 幸
教 育 次 長	宇 野 勘一郎
文化財保護課課長	山 崎 秀 二
同 上 主 任	川 畑 和 弘

(平成 21 年度)

教 育 長	上 路 博
教 育 部 長	三 品 長 治
教 育 次 長	高 岡 秀 和
文化財保護課課長	岩 崎 茂
同 上 主 査	川 畑 和 弘

4. 現地調査および本書の編集は川畑が担当した。
5. 本調査にかかる図面・写真・出土遺物は、守山市立埋蔵文化財センターに保管している。
6. 出土遺物の写真撮影は、寿福 滋（寿福写房）に依頼した。
7. 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。
8. 測量基準点は、平成 10 年 5 月 26 日に下之郷町に設置された 3 級基準点をもとにした。
(『下之郷遺跡第 25 次発掘調査 基準点測量成果簿』)
9. 本調査については、文化庁記念物課の坂井秀弥調査官、棚宜田佳男調査官、滋賀県教育委員会の大沼芳幸副主幹（当時）の指導を得て実施した。
10. 現地調査にあたっては、岡村道雄（奈良文化財研究所）、布谷知夫・宮本真二（滋賀県立琵琶湖博物館）、河角龍典（立命館大学）各氏のご協力を得た。
11. 現地および整理調査にあたって上記以外にも地権者をはじめ遺跡周辺の方々に、多数のご協力を得ることができた。感謝いたします。

目 次

I 位置と環境

- 1. 下之郷遺跡の位置と概要1
- 2. 調査履歴と経過2

II 調査成果

- 1. 第52次調査の成果7
- 2. 第53次調査の成果 21
- 3. 第54次調査の成果 33

挿 図 目 次

- 図1 守山市と下之郷遺跡位置図
- 図2 下之郷遺跡全体図
- 図3 下之郷遺跡と周辺遺跡
- 図4 第52次調査全体図
- 図5 第52次調査検出遺構断面図
- 図6 第52次調査検出遺構断面図
- 図7 第52次調査出土遺物実測図
- 図8 第52次調査出土遺物実測図
- 図9 第52次調査出土遺物実測図
- 図10 第52次調査区配置図
- 図11 第52次調査SX5201 遺物出土状況図
- 図12 第52次調査周辺調査成果図

- 図13 第53・54次調査位置図
- 図14 第53・54次調査全体図
- 図15 第53次調査検出遺構断面図
- 図16 第53次調査出土遺物実測図
- 図17 第53次調査出土遺物実測図
- 図18 第53次調査出土遺物実測図
- 図19 第53次調査出土遺物実測図
- 図20 第54次調査全体図
- 図21 第54次調査検出遺構断面図
- 図22 第54次調査出土遺物実測図
- 図23 第53次調査周辺調査成果図

- 表1 下之郷遺跡調査年譜
- 表2 出土土器観察表（第52次調査）
- 表3 出土石製品観察表（第52次調査）
- 表4 出土木材観察表（第52次調査）
- 表5 出土土器観察表（第53次調査）

- 表6 出土土器観察表（第53次調査）
- 表7 出土土器観察表（第53次調査）
- 表8 出土石製品観察表（第53次調査）
- 表9 出土石製品観察表（第54次調査）

図 版 目 次

巻頭図版一 第53次調査 調査風景

- 図版一 上：第52次調査遺構検出状況
下：第52次調査遺構検出状況
- 図版二 上：第52次調査遺構検出状況
下：SD5201
- 図版三 上：SX5201
下：SD5201 断割り状況
- 図版四 上：SX5201 南側周溝調査状況
下：SX5201 南側周溝完掘状況
- 図版五 上：第53次調査TA地区全景
下：第53次調査TA地区調査状況
- 図版六 上：第53次調査TB地区検出状況
下：SD5301 断割り状況
- 図版七 上：SD5302 断割り状況
下：SD5303 断割り状況
- 図版八 上：第54次調査平面検出状況
下：第54次調査平面検出状況
- 図版九 上：第52次調査出土土器
下：第52次調査出土石製品

- 図版十 上：第52次調査出土土器
下：第52次調査出土土器
- 図版十一 上：第52次調査出土土器
下：第52次調査出土土器
- 図版十二 第52次調査出土木製品
- 図版十三 上：第53次調査出土土器
下：第53次調査出土土器・石製品
- 図版十四 上：第53次調査出土土器
下：第52・53・54次調査出土石製品
- 図版十五 上：第53次調査出土土器
下：第53次調査出土土器
- 図版十六 上：第53次調査出土土器
下：第53次調査出土土器
- 図版十七 上：第53次調査出土土器
下：第53次調査出土土器
- 図版十八 上：第53次調査出土土器
下：第53次調査出土土器

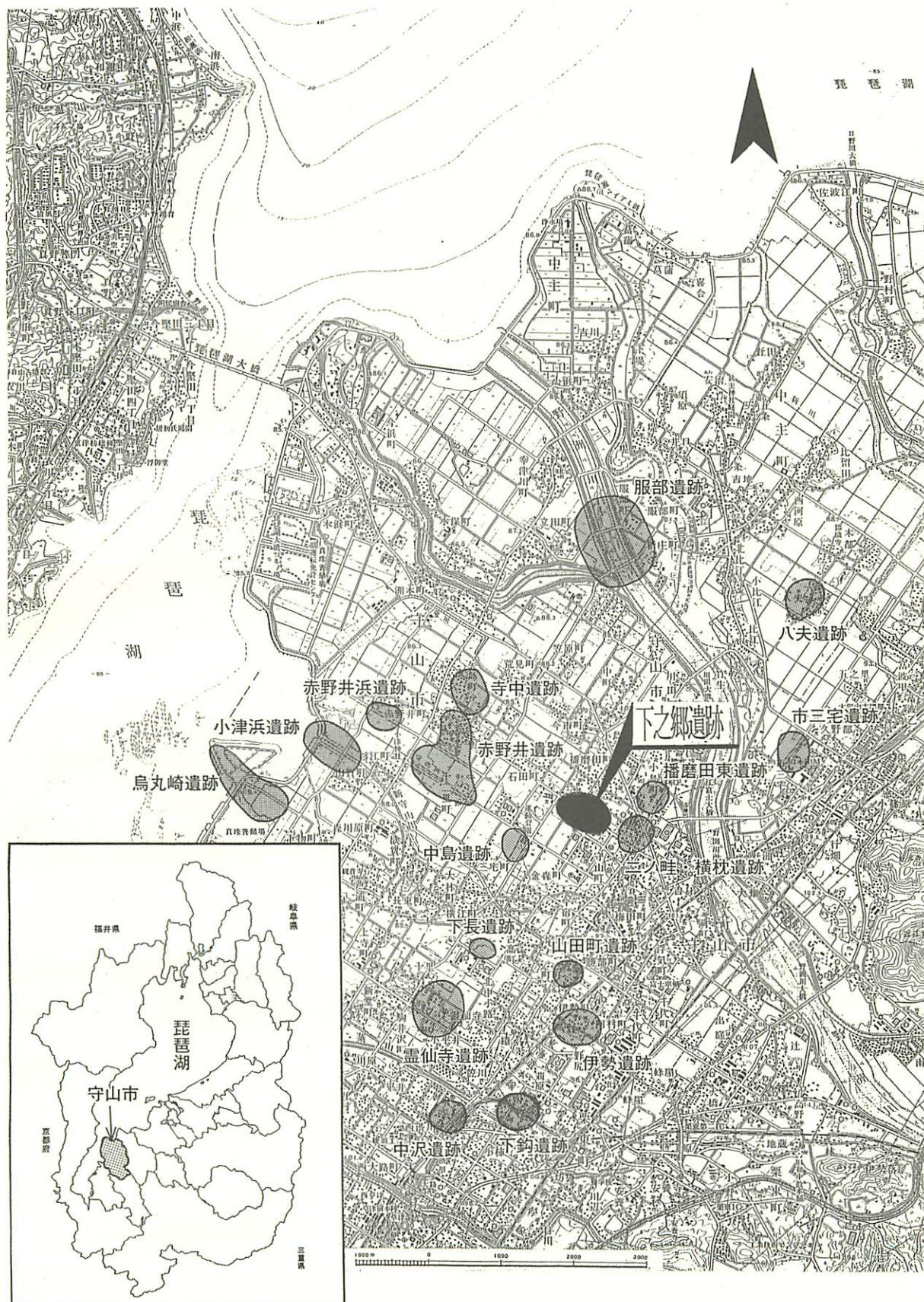


図1 守山市と下之郷遺跡位置図
(周辺の弥生時代集落遺跡)

I 位置と環境

1. 下之郷遺跡の位置と概要

守山市は滋賀県の東南部に位置し、琵琶湖の南東岸に面した平野部を占める。市域は一級河川野洲川が形成した沖積地で、山丘が無く、琵琶湖が海拔 85m 前後、市域の東端で約 106m の標高であることから、ほとんど平坦地であると言える。市域は東西約 6.3km、南北約 10.9km、面積はおよそ 44km²を測る。東から西に傾斜する扇状地性の地形をなし、人口は東の市街地に集中する傾向がある。近畿の経済圏にあり、京阪神からの通勤時間が約 1 時間という距離から昭和 60 年代頃からベッドタウン化が進み、住宅を中心とした開発が著しく、平成 16 年には人口が 7 万人を越えることとなった。守山市内には縄文時代から近世までの遺跡が広く分布し、現在 148 か所が確認されている。縄文時代早期には琵琶湖湖底遺跡である赤野井湖底遺跡が確認される他、中期から後期の集落跡（経田遺跡、下長遺跡など）が 13 か所、晩期の遺跡（服部遺跡、岡遺跡など）が 9 か所で確認されてきている。縄文人の足跡を認める琵琶湖周辺の平野部の中では最も遺跡数の多いところと言える。一方、弥生時代には、弥生前期から後期までの遺跡が 25 か所で確認されている。弥生前期の遺跡では、突帯文土器が弥生土器と共伴する遺跡として、服部遺跡、小津浜遺跡などが平野の中でも比較的低位な場所（三角州帯）に誕生する。弥生前期中段階の土器を出土する遺跡には服部遺跡、新段階には赤野井遺跡、赤野井浜遺跡などが湖辺部に、そしてやや内陸の自然堤防帯には中島遺跡が展開している。それから中期になると寺中遺跡、下之郷遺跡、播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡、山田町遺跡などが湖岸から離れて内陸部扇状地末端部に偏在して展開をはじめめる。これら中期の集落は畿内第Ⅱ・Ⅲ様式期に最盛期をもつ寺中遺跡をのぞき、全て環濠を備えているのが特徴と言える。中期の集落のもう一つの特徴は、同じ場所に長期間継続して集落を営むことはせずに、短期間に移動するという現象がうかがえる。それは（Ⅱ・Ⅲ様式）寺中遺跡 →（Ⅳ様式前・中葉）下之郷遺跡 →（Ⅳ様式中・後葉）播磨田東遺跡 /（Ⅳ様式後葉）二ノ畦・横枕遺跡 /（Ⅳ様式後葉）山田町遺跡 という集落の動きが確認できる。合わせて興味深いのは、下之郷遺跡では竪穴住居が一棟も確認されておらず、高床建物や壁立式建物で構成されていることである。その後続集落である播磨田東遺跡や二ノ畦・横枕遺跡では、ほとんどが竪穴住居で構成されている点である。一般に民族事例をひも解いてみても同じ部族の集団が先祖から引き継いだ居住形態を放棄することは珍しく、その断絶の背景については何らかの歴史的解釈を用意していかなければならない。集落と墓域の関係では、下之郷遺跡の場合、一所に造墓するのではなく、確認されているだけでも周辺 7 か所（酒寺遺跡・八ノ坪遺跡・吉身西遺跡 2 か所・金森東遺跡・石田遺跡・今市遺跡など）に分散して認められる。そのあり方は一辺約 6 ～ 10 m 程度の方形周溝墓が 2 列配置で列状に連結して営まれており、全容が把握されている墓群はないが少なくとも十数基、多ければ 1 墓群 50 基を越える可能性が高い（図 3）。そして弥生時代後期になると中期の集落から離れた場所に小集落として、酒寺遺跡、吉身西遺跡、金森東遺跡などが形成される他、大型建物を多数配置する拠点集落、伊勢遺跡が扇状地上に成立する。以上述べてきたように弥生遺跡の立地は、前期の湖岸周辺から後期の内陸部へ進出するという傾向を認めることができる他、前期の比較的早い時期から水田稲作を導入し、河川を利用した水田開発が行われていったことが知られる。しかし、野洲川下流域平野全域に定住集落が展開するようになるのは古墳時代に入ってからのもので、特に扇状地の水田開発となると古墳時代中期以降に降る可能性が高いと考えられる。

2. 調査履歴と経過

下之郷遺跡は野洲川下流域平野の中央部にあり、地形分類上の扇状地末端部分に位置している。これまでに60回以上の調査が進められ集落の様子が徐々に明らかになってきている。これまでの調査の起点にあたる第1次調査は、1980年の公共下水道工事に伴う立会調査で、溝状遺構と柱穴から弥生時代中期後葉の土器と磨製石鏃が検出されたことにはじまる。その後は、各種開発に伴う発掘調査が行なわれることとなる。1983年には都市計画道路建設にかかる発掘調査で、遺跡の南西側で幅約5～7m、深さ約1.5mの大溝が10m間隔で3条並行した状態が検出され、その大溝3条を挟んで北東側においては大小の土坑や柱穴が密集した状態で検出された。また第4次調査では、前年に検出された大溝の延長に想定される場所で新たに大溝が確認され、環濠集落として確実視されることになった。1987年の工場増築に伴う発掘調査（第9次調査）では3条の環濠とさらに外側に3条の大溝が検出され、その環濠の一部に柵（杭列）のあることがわかった。さらに1989年の第14次調査でも3条の環濠が検出され、大量の土器や石器とともに木製の戈の柄が発見された。

転機となったのは、1994年に行なわれた現下之郷町里中道における下水道工事の立会調査である。この調査は、地下約2mに下水管を埋設する際に遺構を確認していくものであったが、これまで把握されていなかった環濠集落の北側環濠の位置を確認することができた。その結果3条環濠がめぐらされた範囲は南北径で260mとおさえられることとなった。1996年に行なった第23次調査では、3条の環濠が検出され、その最も内側の環濠から埋立てて造られた集落の出入口が発見された。出入口は、柵や門で堅固に護られていて周辺から銅剣や磨製石剣、弓、石鏃などが多数出土し、弥生時代の戦いの痕跡を如実に語る場所として評価された。ここまでの調査で環濠集落の範囲がおおよそ推定されるようになったが、北東側の環濠周回位置については判然としていなかった。それは、1993年に実施した隣接する酒寺遺跡の発掘調査で下之郷遺跡に近い位置で、幅4m前後の溝が複数並行する状態で検出されていたが、下之郷遺跡で検出されていた本来的な3条の環濠のあり方（幅3～4m、深さ1.5m前後）ではなかったため、やはり下之郷遺跡の環濠であることの判断は保留せざるを得なかったからである。その後、1998年の第25次調査で本来的な3条の環濠の外側にさらに3条の大溝が見つかったことで、遺跡の東側には3条の外側にさらに複数の環濠が掘削されていることが確実となった。また酒寺遺跡の調査で検出されていた大溝が25次調査の溝に繋がることが判明し、結果的に遺跡の東側には8～9条の環濠が掘られていることがわかった。この成果から9次調査の外側の3条の溝も環濠と理解することが可能となった。

環濠内部の調査は、これまで小面積を点的に行なってきたが、第27次調査では中央部を面的に広げることとなった。検出された遺構には井戸や土坑、壁立式建物、区画溝が密集する状態で検出されたが、なかでも集落中央部で見つかった南北に延びる区画溝は集落の中核施設を取り囲む方形区画の一種と考えられ、その後の確認調査の重要課題となっている。重要遺跡範囲確認調査は、この25、27次の調査と史跡化への取組みを契機にして周辺の遺構分布と環濠集落域の把握を目的に平成10年度から実施していくこととなった。29次、31次調査と平成11年度に実施した34次、35次、37次、39次の確認調査は下之郷遺跡の東側環濠の位置を把握することに目的がおかれ、3条環濠の周回する推定ラインがおさえられた。国の史跡指定は、これら確認調査成果をもとに下之郷町土地権利者への説明会を繰り返し、平成13年度より指定同意取得に入り、同年8月に指定申請、翌年3月に国指定遺跡として官報告示がおこなわれた。



図2 下之郷遺跡全体図

表1 下之郷遺跡調査年譜

調査回数	調査年		種類	調査原因	調査地番	調査(開発)面積	概略および備考
1	1980	S55	立会	下水道	北黒田	—	3箇所中2箇所が下之郷遺跡範囲内
2	1982	S57	立会	下水道	曾々井	—	調査時は吉身西遺跡
3	1983	S58	本掘	都市計画道路	南黒田	約2160㎡	3条の環濠、調査時は吉身西遺跡
4	1984	S59	本掘・確認	個人住宅	平川端 707-1	(500㎡)	3条の環濠
5	1984	S59	本掘	個人住宅	井上 631-4	(455㎡)	
酒寺遺跡で調査	1985	S60	本掘	個人住宅	シノ 194-10	約270(330)㎡	溝・土坑・流路、下之郷遺跡範囲外
6	1986	S61	本掘	個人住宅	井上	(250㎡)	土坑・ピット
7	1986	S61	本掘	個人住宅	下鎌田 646-1	(370㎡)	下之郷遺跡範囲外
7	1986	S61	本掘	個人住宅	下鎌田 646-3	(400㎡)	下之郷遺跡範囲外
8	1985	S60	本掘	個人の車庫	北黒田	約19(80㎡)㎡	柱穴、溝2条
9	1987	S62~63	本掘	工場増設	上黒田 708	約1,600㎡	3条の環濠、溝、土坑、鳥形木製品
10	1987	S62	確認調査	個人住宅	シノ 198-4	559㎡	
11	1987	S62	試掘・発掘	個人住宅拡張	金影 610-5	160(381)㎡	環濠
12	1987	S62	試掘・発掘	店舗	皆広	(230㎡)	
13	1988	S63	本掘	個人用物置	橋本 615	(150㎡)	溝
酒寺遺跡で調査	1988	S63	本掘	個人住宅	シノ 192-4	(797㎡)	下之郷遺跡範囲外
14	1989	H元~2	本掘	事務所・控室	上黒田	約400㎡	3条の環濠、溝、土坑、戈の柄
15	1989	H元	本掘	農用倉庫建築	井上 631-5	298㎡	土坑、溝、掘立柱建物
16	1991	H3	立会・本掘	店舗用駐車場	井上 635-6	(165㎡)	溝、土坑、柱穴
17	1992	H4	本掘	共同住宅	金影 611-1 他		溝
18	1992	H4	本掘	事務所建築	見田 210-2	約100㎡	溝、土坑、柱穴
19	1993	H5	立会	公共下水道	橋本	1,450㎡	環濠、土坑、柱穴
20	1994	H6	本掘	倉庫建築	北黒田 673-6	約30(363)㎡	土坑、柱穴
21	1994	H6	立会	公共下水道	幸徳庵 325 他	2,040㎡	北側の環濠3条
酒寺遺跡で調査	1995	H7	本掘	個人住宅	シノ	約900㎡	下之郷遺跡範囲外
吉身西 71 次	1996	H8	本掘	共同住宅	下鎌田 647 他	約230㎡	下之郷遺跡範囲外
22	1996	H8	本掘	共同住宅	皆広	約300㎡	調査時は吉身西遺跡 72 次
23	1996	H8	本掘	宅地造成	橋本	約1,200㎡	3条の環濠と建物群、銅剣
24	1997	H9	本掘	農用倉庫	見田	110㎡	溝、土坑、柱穴
25	1997	H9	本掘	道路側溝	北黒田	14㎡	土坑、柱穴
25	1997	H9	本掘	都市計画道路	見田	約2,300㎡	6条の環濠、壁立式建物、木偶
26	1998	H10	立会	下水道工事	北黒田	—	環濠
27	1998	H10	本掘	都市計画道路	北黒田 671-7	1,800㎡	区画溝
28	1998	H10	平面調査	確認調査(重)	北黒田 676	40㎡	「報告書Ⅰ」
29	1998	H10	平面調査	店舗	見田 210-1	1,241㎡	3条の環濠と盾「報告書Ⅰ」
30	1998	H10	平面調査	個人住宅	橋本 622	約457㎡	環濠「報告書Ⅰ」
31	1998	H10	平面調査	確認調査(重)	見田 215-1	1,157㎡	高床建物と壁立式建物「報告書Ⅰ」
32	1998	H10	平面調査	個人住宅	北黒田 634-1	590㎡	1条の環濠と壁立式建物「報告書Ⅰ」
33	1999	H11	平面調査	共同住宅	皆広 640-37	850㎡	5条の環濠「報告書Ⅱ」
34	1999	H11	平面調査	確認調査(重)	シノ 204-1	400㎡	4条の環濠「報告書Ⅲ」
35	1999	H11	平面調査	駐車場	見田 217 他	500㎡	2条の環濠「報告書Ⅲ」
36	1999	H11	平面調査	店舗建築	見田 218-1・2	250㎡	2条の環濠「報告書Ⅲ」
37	1999	H11	平面調査	確認調査(重)	シノ 202-1	500㎡	2条の環濠「報告書Ⅲ」
38	1999	H11	平面調査	個人住宅	北黒田 676-1	477㎡	溝、柱穴「報告書Ⅲ」
39	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	平川端 705-1	400㎡	1条の環濠「報告書Ⅲ」
40	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	井上 635-1	250㎡	溝、柱穴「報告書Ⅲ」
41	2000	H12	平面調査	個人住宅(立)	幸徳庵 240	10㎡	環濠「報告書Ⅲ」
42	2000	H12	本掘・平面	宅地造成	上門田 539-1	3,986㎡	外周環濠の一部「報告書Ⅲ」
43	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	橋本 615-3、2	60㎡	環濠「報告書Ⅲ」
44	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	井上 632-1	600㎡	区画溝、大型掘立柱建物「報告書Ⅳ」
45	2001	H13	平面調査	共同住宅	北黒田 676-2、5	580㎡	区画溝、井戸「報告書Ⅳ」

調査次数	調査年	種類	調査原因	調査地番	調査(開発)面積	概略および備考	
46	2001	H13	本掘・平面	宅地造成(重)	久戸 504-1	1,900㎡	外周環濠、壁立式住居
47	2001	H13	平面調査	共同住宅(重)	上門田 544-1	約951㎡	外周環濠の一部
48	2001	H13	平面調査	共同住宅(重)	上門田 543-1	991㎡	外周環濠の一部
49	2002	H14	平面調査	宅地造成(重)	久戸 507-1.4	約982㎡	外周環濠の一部
50	2002	H14	平面調査	個人住宅(重)	久戸 290	約20㎡	
51	2002	H14	平面調査	個人住宅(重)	皆広	174㎡	集落内、井戸
52	2003	H15	平面 / 本掘	共同住宅(重)	上門田 546-1	約1,090㎡	方形周溝墓 *本書に報告
53	2003	H15	平面調査	確認調査(重)	皆広 643-1	約1,000㎡	環濠の一部 *本書に報告
54	2003	H15	平面調査	確認調査(重)	皆広 640-1	約400㎡	環濠の一部 *本書に報告
55	2004	H16	平面調査	確認調査(重)	井上 631-2	約700㎡	建物、区画溝
56	2005	H17	平面調査	個人住宅(重)	金影 610-4,5	約200㎡	環濠 3 条
57	2005	H17	平面調査	確認調査(重)	見田 208-1	約300㎡	環濠の一部
58	2005	H17	平面調査	確認調査(重)	井上 633	約1,200㎡	建物、区画溝
59	2006	H18	平面調査	個人住宅(重)	シノ	354㎡	環濠 3 条
60	2006	H18	平面調査	個人住宅(重)	シノ	約300㎡	環濠の一部
61	2006	H18	発掘調査	整備前調査	シノ 204-1	約3,000㎡	環濠 6 条、掘立柱建物
62	2007	H19	発掘調査	整備前調査	シノ 201-4	4,288㎡	環濠 3 条
63	2008	H20	発掘調査	整備前調査	平川端 703-3 他	約3,100㎡	環濠、溝
64	2008	H20	発掘調査	宅地造成	平田 690-1	約500(2,097)㎡	環濠、大溝ほか (正福寺遺跡と重複)
65	2008	H20	平面調査	確認調査(重)	平田 690-1 の一部	約1,000㎡	環濠、大溝ほか (正福寺遺跡と重複)
66	2008	H20	平面調査	個人住宅(重)	金影 607	約120㎡	環濠の一部

その後も遺跡内外で範囲確認調査を進めていくこととなっているが、大きく分けると2つの調査成果が挙げられる。一つは、集落の西側で3条環濠の外方でさらに居住区と環濠が検出されたこと。もう一つは、集落内部で区画溝と大型建物が複数棟、配置されていることが判明してきたことである。前者については、平成12年度の確認調査(42次)で、これまで弥生時代の遺構がないと考えられていた地点で環濠や住居、井戸跡などが検出された。さらに46次では、これまでの西側3重環濠の外側約250mの地点で2条の環濠と内側で井戸や壁立式建物が発見され、3条環濠の外側にも居住域が設けられていることが判明した。そして、平成13年度に実施した第47・48次調査でも環濠の一部や通路などが確認されている。これらの3重環濠より外側の環濠については、外周環濠=すなわち3重環濠帯を「内濠」と呼称するのに対し「外濠」という用語を使用し、同心円状に二重構造になっている可能性が指摘できる。しかし、東側に立地する3重環濠に対し、別個の居住空間を想定し分岐して囲んだ集落域とみる考え方も現状では考慮しておく必要がある。これまでの調査成果をもとに遺跡全体の規模を考えると、東端から西端までの距離は約670m、南北が約460mで面積はおよそ25haにもおよぶことが推定されるようになってきている。

そして、後者の成果については、第27次調査で検出された南北溝に関連して、平成10年度に実施した第32次調査で南北と東西に伸びる区画溝と壁立式平地住居が検出された。平成13年度に実施した第44次調査では、床面積が55㎡を超える独立棟持柱付大型建物が発見されるとともに東西に伸びる区画溝が確認された。その時点での大型建物の集落内での位置づけは「首長が儀式やまつりをおこなう場所」「集会所」「ムラ全体の共同倉庫」などの意見が出されるとともに、その建物は中心地域に(方形区画)の北西一角に位置する建物の可能性が指摘された。しかし、その後、平成17年に実施した第55次調査では、44次調査で検出された建物のさらに北側で整然と方位を合わせて並んだ掘立柱建物が3棟発見され、また平成18年度に実施した第44次調査の南側(58次)でも方位を揃えて並ぶ建物と、別の方位軸

をもつ掘立柱建物などが5棟以上検出され、集落内部の建物構成は非常に複雑で、時間経過とともに変容していく様が窺えるようになってきている。現時点までの集落中央部の調査では、建物の分布や構成をあらかじめ平面で把握する確認調査で止めているため、詳細な年代把握や建物の構造、変遷は今後の調査で明らかにしていかなければならない。ただ、丸い環濠集落の中の一所に四角く溝で囲んだ場所を設け、その内部に集落やその地域全体を体現するような建物を設ける、いわゆる方形区画のモデル的な様相とは異なった空間が展開しているものと考えられるようになってきている。

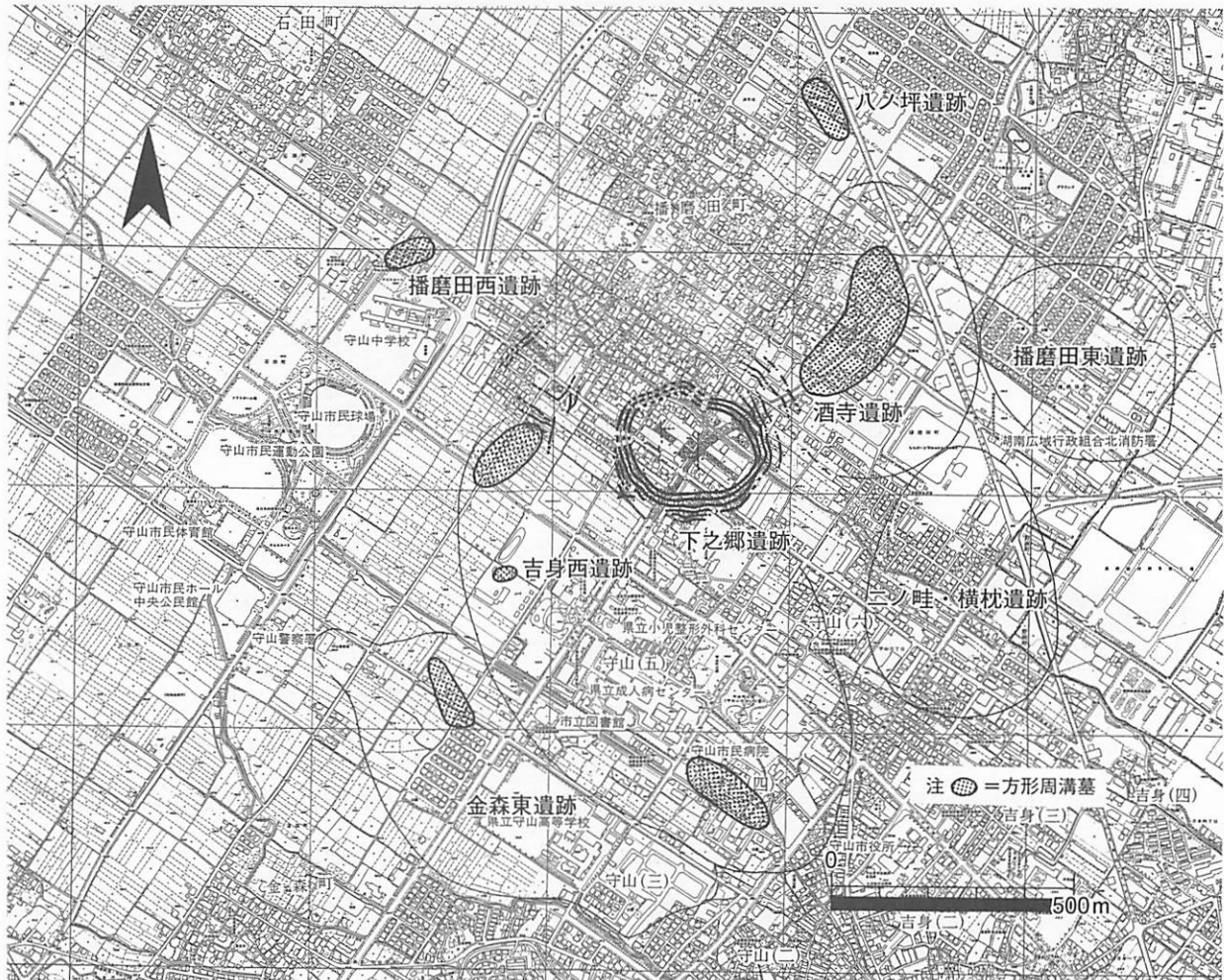


図3 下之郷遺跡と周辺遺跡（下之郷遺跡の環境と墓の位置）

（下之郷遺跡関連 参考文献）

- 1990 「野洲川下流域遺跡群の構造」『守山市文化財調査報告書第38冊』守山市教育委員会
- 2001 『弥生のタイムカプセル 下之郷遺跡』 守山市教育委員会
- 2003 『弥生のなりわいと琵琶湖－近江の稲作漁労民－』 守山市教育委員会
- 2004 『下之郷遺跡確認調査報告書 I』 守山市教育委員会
- 2005 『下之郷遺跡確認調査報告書 II』 守山市教育委員会
- 2005 『守山市誌 考古編』 守山市誌編さん委員会
- 2006 『下之郷遺跡確認調査報告書 III』 守山市教育委員会
- 2007 『下之郷遺跡確認調査報告書 IV』 守山市教育委員会
- 2008 『下之郷遺跡確認調査報告書 V』 守山市教育委員会

Ⅱ 調査成果

1. 第 52 次調査の成果

- (1) 調 査 地 守山市下之郷三丁目字
上門田 546-1・546 番地
- (2) 調 査 期 間 平成 15 年 5 月 16 日
～ 同年 7 月 28 日
- (3) 調 査 面 積 約 1,090 m²
- (4) 担 当 者 川畑 和 弘
- (5) 調査経緯と方法

第 52 次の調査地は、3 条環濠に囲まれた集落本体の西方、約 120 m の位置にあり、平成 13 年度に調査した 48・49 次調査の隣地部分にあたる。

調査原因は、集合住宅建築に伴う造成工事で、事前に対象地の範囲内を試掘しながら遺構が分布する地域を把握し、トレンチ設定を行った(図 10)。遺構調査は、平面検出による確認調査を実施する部分と、工事によって破損することになる部分については発掘調査(原因者負担)を実施した。

今回の報文では、前者の確認調査で検出した遺構を中心に記したが、発掘調査を実施した部分についても、対象地の遺構全体を把握するうえで報文に加え掲載した。

調査は、表土除去と土置場確保の都合により TA 地区から着手し、その部分が完了した後に TD 地区→TB 地区→TC 地区(図 10)の順で調査を実施した。この内発掘調査を実施したのは、TA・TB・TC 地区で、TD 地区については平面検出と一部断ち割りによる土層断面観察による確認調査にとどめた。掘削調査が完了し、平面測量図を完成させた後は、現地説明会を開催(一般公開:平成 15 年 7 月 11 日)し、その後、埋め戻し旧状に還し、調査を完了した。

(6) 検出遺構

遺構は東側においては、現在の水田耕作土上面から約 30cm 下位にある黄灰色極細砂シルト

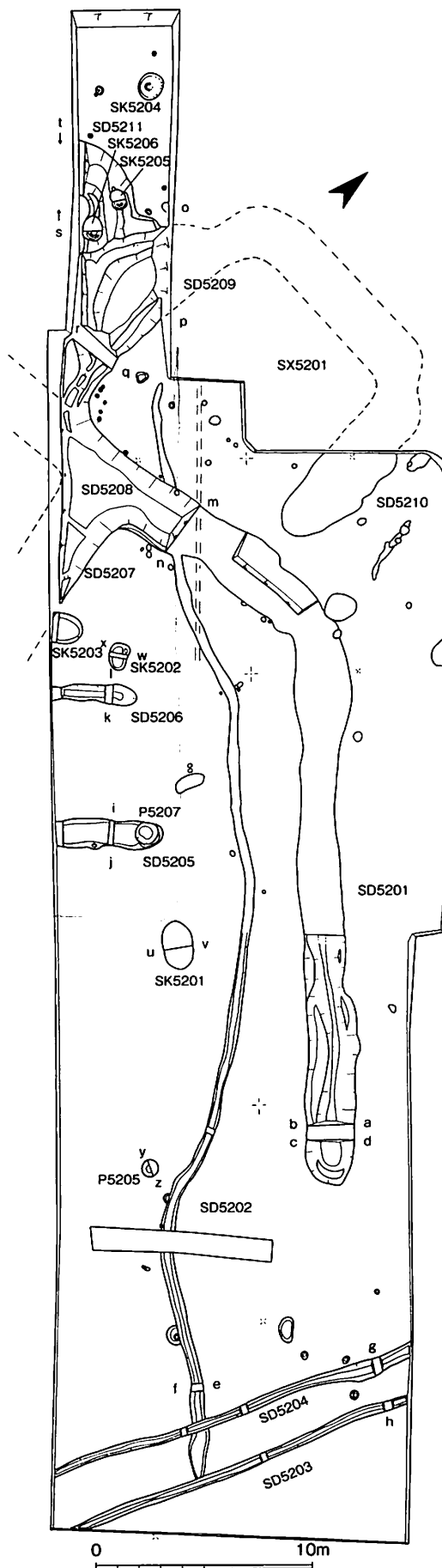


図 4 第 52 次調査全体図

の上面で、また、西側においては畑地利用がされているため周辺の水田より高く、現耕作土の地下約 60cm の位置で遺構が検出された。遺構検出面（標高）の調査区東端と西端での比高差は 20cm 程度東側が高く、緩やかではあるが西側が低くなっている。

(6) 検出遺構

今回の調査地では、大溝と溝、土坑、方形周溝墓、柱穴などが検出された。

SD5201

SD5201 は、TA 地区の中央近くを先端にして TD 地区、TB 地区へと掘られた大溝で、幅 2.5 m、深さ 1.2 m を測る。断面形状は緩やかな U 字形（一部は V 字形）をしている。大溝を埋める堆積土には砂はほとんど含まれず、概ね粘土やシルトによって埋もれている。後述する方形周溝墓（SX5201）とは、その南辺にあたる周溝と大溝が重複する形で検出されている。土層断面観察による切り合い（新古関係）は判然としなかった。出土遺物には、畿内第Ⅳ様式後半の在地系土器の口縁破片が出土している。方形周溝墓（SX5201）出土土器と比較するも、出土点数が少量であるため新古関係を明確に判定するには至っていない。石製品には、打製石鏃（52001S）が 1 点出土している。

SD5202

調査区（TA 地区）の東端から TB 地区の西端にかけて延長 55 m 程検出された小溝で幅約 30cm、深さ約 10cm を測る。SD5203 と SD5204 に交差、接触するかたちで検出されており、導水機能など SD5203 や SD5204 と相互に関連する遺構の可能性はある。

SD5203

調査区（TA 地区）の東端で検出された小溝で、幅 40cm、深さ 15cm を測る。南から北に向けて掘られている。第 47・48 次調査で延長部分が検出されており、南方から水を導く施設の可能性がある。

SD5204

SD5203 と同方向に並行する状態に掘られた小溝で、幅、深さとも、ほぼ同様である。SD5203 との間隔は約 2～3 m である。

SD5205

TB 地区の南西端で検出された小溝で、幅 80cm、深さ 25cm を測る。北東から南西に向けて掘られている。溝の北東端には柱穴 P5207 がある。出土遺物には土器 52003～52005 があり古墳時代前期の特徴をもっている。石製品では磨製石斧の破損品（52003s）が出土している。

SD5206

TB 地区の南西端で検出された小溝で、幅 70cm、深さ 25cm を測る。北東から南西に向けて掘られている。

SD5207

TB 地区のほぼ中央で検出された溝で、幅約 1.2 m、深さ 95cm を測る。南側に延びており、方形周溝墓の周溝の一部である可能性がある。Ⅳ様式中葉の特徴をもつ甕（52008）が出土している。

SD5208

TB 地区で検出された溝で、東から西に向けて延びており、幅 3.2 m、深さ 1.2 m を測る。方形周溝墓（SX5201）の周溝の一部である可能性が高い。Ⅳ様式後葉の特徴をもつ壺（52009・52010）が出土している。また、下層から最下層にかけては、自然木破材や木製品（52001W・52002W・52003W・

52004W)が多量に出土している。(出土状況詳細は、図 11 による)

SD5209

TB ～ TC 地区で検出された溝で、南から北に向けて掘られている。幅 4.5 m、深さ 120cm を測る。方形周溝墓 (SX5201) の周溝の一部である可能性が高い。Ⅳ様式中～後葉の特徴をもつ壺 (52011・52012) で、ほぼ完全な形をとどめるものが出土している。石製品では磨製石斧 (52002S) が出土している。(出土状況詳細は、図 11 による)

SD5210

TD 地区で検出された溝で、南から北に向けて延びており、幅 4.0 m を測る。方形周溝墓 (SX5201) の周溝の一部である可能性が高い。断割りを入れていないため詳細は不明である。

SD5211

TC 地区で検出された溝で、SD5209 に接続する状態で掘られており、L 字形に折り曲がりさらに西方向に伸びている。幅約 1.5 m、深さ約 60cm を測る。調査区外に広がっているため全容は不明であるが、方形周溝墓の周溝の一部である可能性がある。

SK5201

SK5201 は、TA 地区の北西で検出された直径 2 m × 1.2 m の楕円形をした土坑で深さ 60cm を測る。最深部は二段掘状になっており柱が据えられていた可能性があるが、用途等は判然としない。

SK5202

SD5205 の北東先端で検出された土坑で、直径約 70cm の円形で、深さ約 90cm を測る。

SK5203

TB 地区で検出された直径約 1 m の楕円形をした土坑で深さ 60cm を測る。出土遺物は無い。

SK5204

TC 地区で検出された直径約 1 m の楕円形をした土坑で深さ 60cm を測る。

SK5205

TC 地区 SD5211 内部で検出された土坑で、直径約 1 m、深さ 60cm を測る。

SK5206

TC 地区 SD5211 内部で検出された土坑で、直径約 1 m、深さ 60cm を測る。在地系の土器 3 点が出土しており、いずれもⅣ様式前葉の特徴をもっている。

SX5201

調査区の範囲に限られて詳細は判然としない部分を残すが、一辺約 10 m の方形周溝墓の可能性が高い。周溝 (SD5208・SD5209・SD5210) は一辺の中央が深く、コーナー部は浅く、途切れている部分もある。マウントや主体部は残存していない。年代は出土した土器からみるとⅣ様式の中でも前葉に遡るものはなく、中葉に位置づけされるものと考えられる。SD5208、SD5209 から出土した土器は、壺 (直口壺や有段口縁壺など) に限られ、木製品では盾が出土している。周溝墓へ供献されたものの可能性がある。

P5201

SD5201 もしくは SD5204 に付随する柱穴で直径約 20cm、深さ約 20cm を測る。出土遺物は無い。

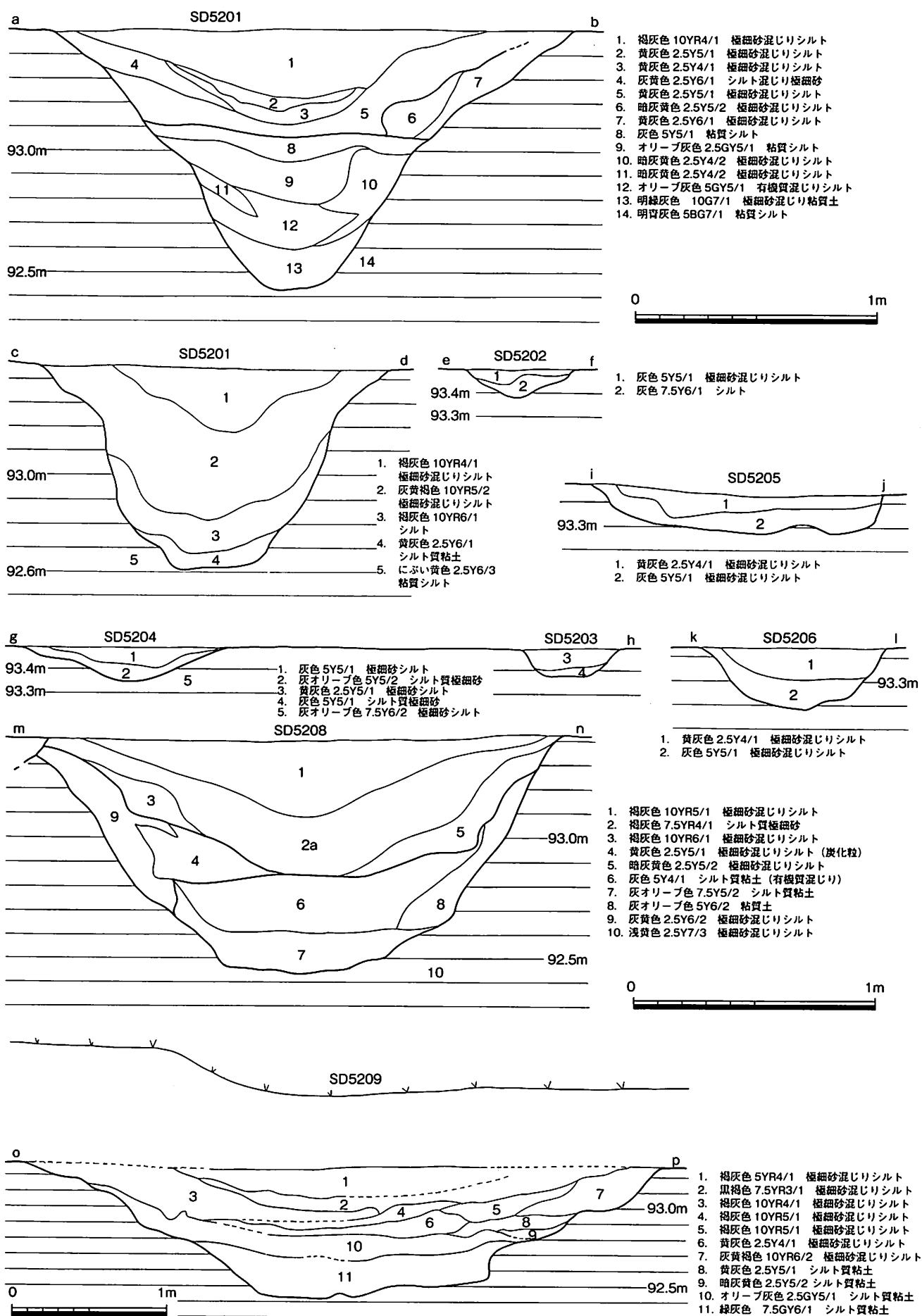


図5 第52次調査検出遺構断面図

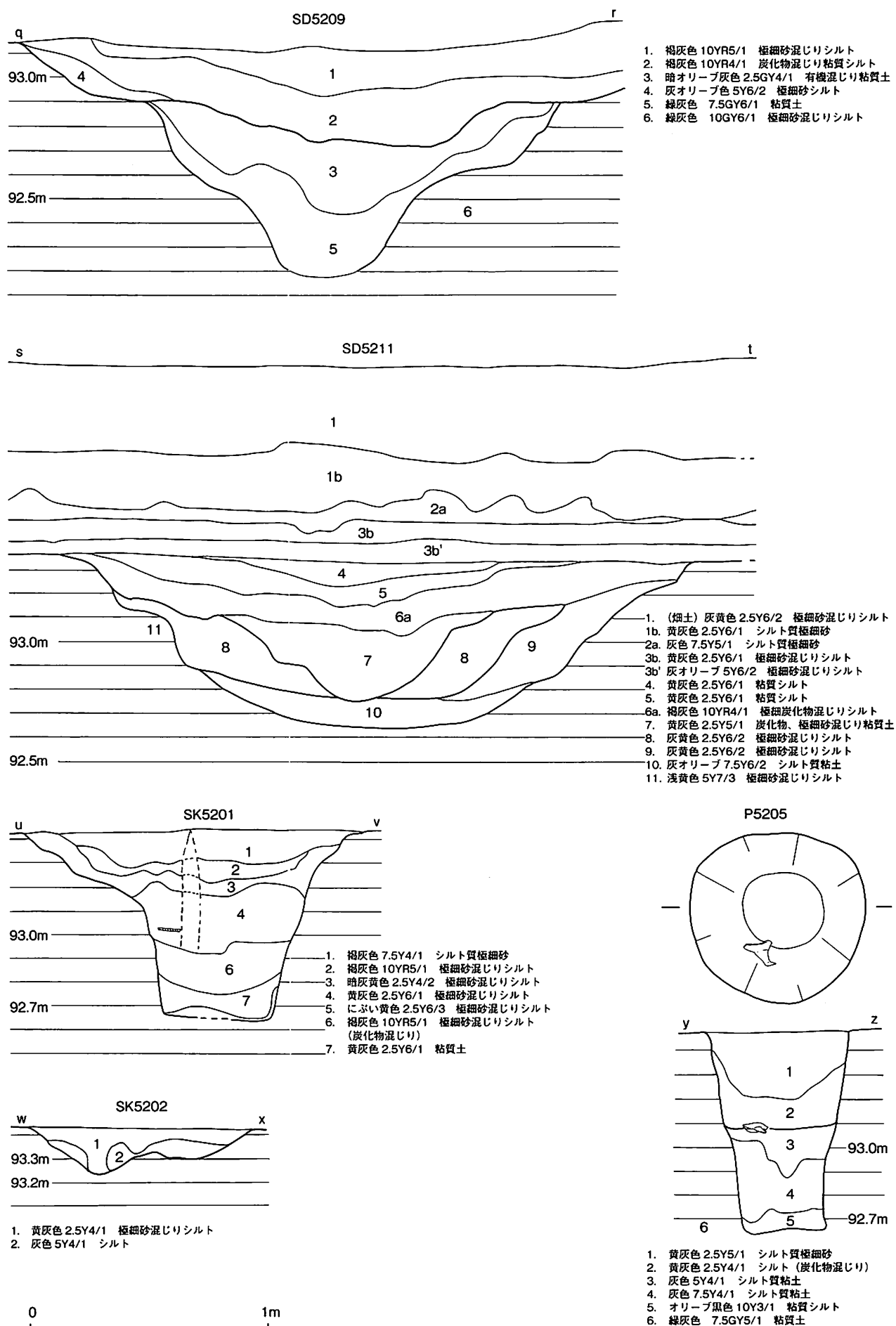


図6 第52次調査検出遺構断面図

P5202

SD5201 もしくは SD5204 に付随する柱穴で直径約 10cm、深さ約 20cm を測る。出土遺物は無い。

P5203

SD5202 に付随する柱穴で直径約 20cm、深さ約 10cm を測る。出土遺物は無い。

P5204

SD5202 に付随する柱穴で直径約 10cm、深さ約 10cm を測る。出土遺物は無い。

P5205

直径約 30cm、深さ約 90cm を測る柱穴もしくは土坑。中層より古墳時代前期の小型丸底壺や高坏が出土している。

P5206

直径約 30cm、深さ約 90cm を測る柱穴もしくは土坑。出土遺物は無い。

P5207

TC 地区 SD5205 の先端部で検出された柱穴で、直径約 90cm、深さ 80cm を測る。出土遺物には 52006・52007 がある。時期は古墳時代前期と考えられる。

(7) 出土遺物

今回の調査では、大溝、方形周溝墓、土坑、柱穴から遺物が出土した。

土器 (52001 ～ 52016)

土器については、図示可能なもの 16 点を提示しておく。大溝 SD5201 からの出土土器は、少量で図示できるものは 2 点 (52001・52002) に限られる。大溝への導水用小溝と考えられる SD5203・SD5204 からは図示できる出土遺物はない。方形周溝墓 SX5201 の出土遺物には周溝と考えられる SD5208・SD5209 から出土した完形品を含めた 4 点を掲示しておく (52009・52010・52011・52012)。それ以外は小片であるため図示していない。土坑出土の土器には、SK5204 の 1 点 (52013) と SK5206 の 3 点 (52014 ～ 52016) を掲示した。SK5206 の 3 点の遺物は畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式の前葉に位置するもので、これまで下之郷遺跡から出土した土器のなかでも、最も古い様相を持つものである。

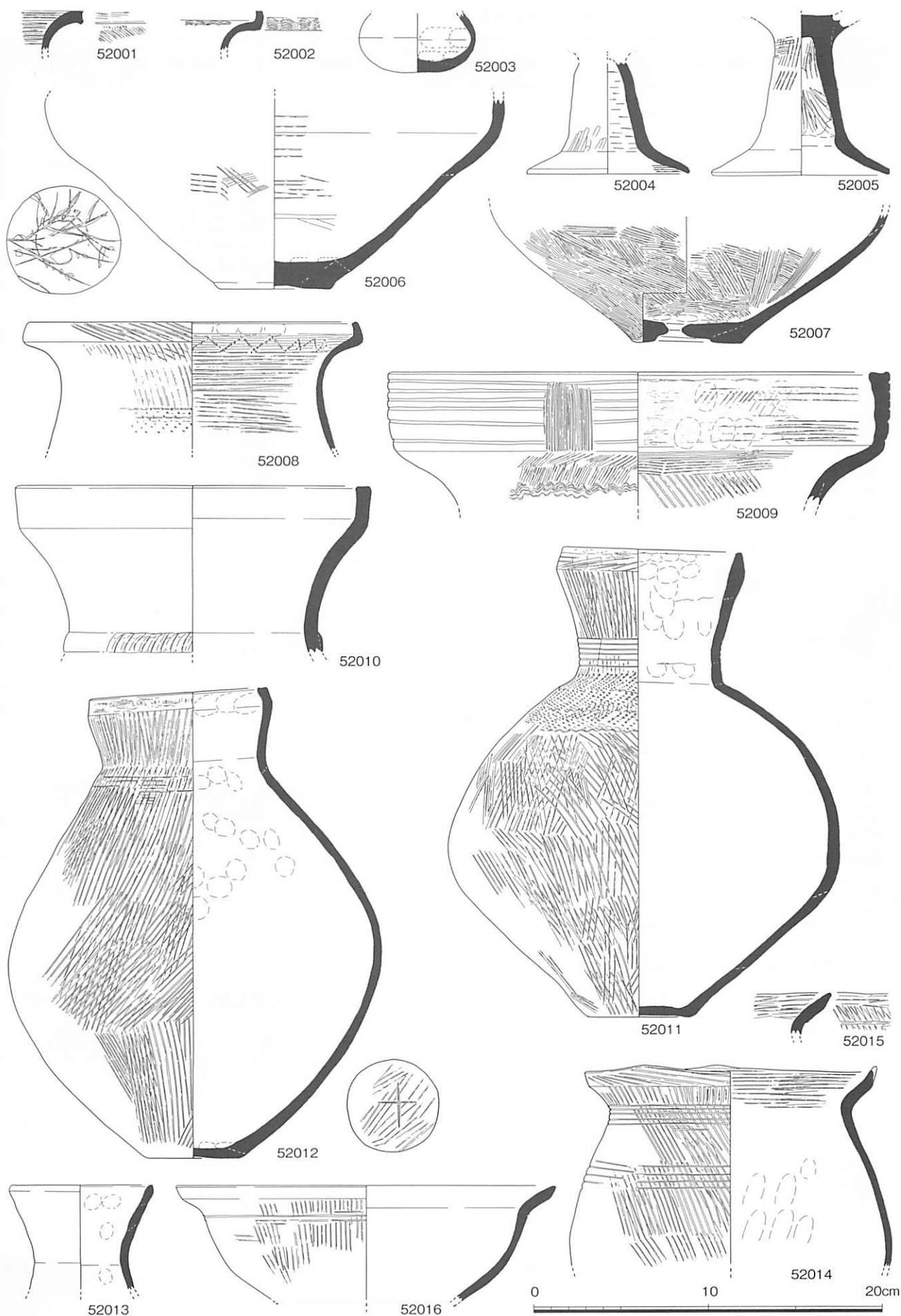


图7 第52次調査出土遺物実測図

表2 出土土器観察表 (第52次調査)

実測番号 採掘図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調 / 胎土 / 焼成	備考
52001 図7 図版十一	壺	TA (I)	SD5201	下層 褐色 オリソ	口径: 不明 残存高: 2.3cm		内外面にハケ目が見られる。	色調: 灰褐色 5YR4/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
52002 図7 図版十一	甕	TA (I)	SD5201	中層 青灰色	口径: 不明 残存高: 2.4cm	外反する第1口縁からやや内傾 気味に第2口縁を立ち上げる。	第2口縁外面は、上端部をヨコナデ したのち、波状文を施す。	色調: 灰褐色 5YR6/2 ~ 黒褐色 5YR2/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
52003 図7 図版十一	小型 丸底壺	TA (I)	P5205		最大腹径: 6.8cm 残存高: 3.4cm		内面指ナデ。	色調: 淡褐色 5YR8/4 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	体部 1/2
52004 図7 図版十一	高坏	TA (I)	P5205		脚底径: 9.4cm 残存高: 6.4cm	裾部で屈曲気味に開く。		色調: にぶい褐色 5YR7/4 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	脚部のみ
52005 図7 図版十一	高坏	TA (I)	P5205	表面土	脚底径: 10.2cm 残存高: 9.3cm	裾部で屈曲気味に開く。		色調: 赤褐色 10YR6/6 ~ 淡褐色 5YR8/3 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	脚部のみ
52006 図7 図版十	壺	TB (I)	P5207	最下層	最大腹径: 26.6cm 残存高: 11.0cm	やや上げ底。腹部が張る。	内外面にハケ目が見られる。	色調: 灰白色 5YR8/2 ~ 褐灰色 5YR4/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	底部~体部 1/2 底面に植物の 圧痕
52007 図7 図版十	壺	TB (I)	P5207		底径: 6.3cm 残存高: 7.5cm	底部中央位に穿孔がある。		色調: 淡赤褐色 25YR7/4 ~ 灰白色 7.5YR8/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	底部 1/2
52008 図7 図版十一	甕	TB (I)	P5207		口径: 19.0cm 残存高: 7.5cm	外反する第1口縁から内傾気味 に第2口縁を立ち上げる。	外面第2口縁斜め、縦ハケ。頸部に 櫛描列点文。第2口縁斜ハケ。内面 横ハケの後に櫛描山形列点文。	色調: 灰白色 10YR8/1 ~ 灰黄褐色 10YR4/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/4
52009 図7 図版十一	壺	TB (I)	SD5208	青灰色 土下層	口径: 28.6cm 残存高: 7.7cm	外反する第1口縁から垂直に第 2口縁を立ち上げる。端部は内 側に肥厚して水平な面を作る。	外面第2口縁ハケの後波状文。第2 口縁6条の凹線を廻らせた後、縦櫛 描直線文。内面第1口縁斜めハケ、 横ハケ。第2口縁横ハケ、横ナデ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/4
52010 図7 図版十一	壺	TB (I)	SD5208	中層 (有機土) 褐色土	口径: 20.2cm 残存高: 9.9cm	外湾気味に伸びる口頸部が角度 を変えて直立し端部は水平な面 を作る。頸部に貼付凸帯。	凸帯頂部にキザミ目。	色調: 淡褐色 5YR8/4 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/4
52011 図7 図版九	壺	TC (I)	SD5209	下層	口径: 10.0cm 底径: 5.8cm 器高: 27.2cm	平底を呈し最大腹径を中位に置 く。やや外傾して伸びる口頸部 の端部を内傾気味の面に仕上げ る。	外面口頸部縦ハケの後端部横ナデ、 頸部に櫛描直線文。体部縦、斜ハケ の後肩部に櫛描列点文。内面指オサ エ、ナデ。	色調: 灰白色 7.5YR8/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	完存
52012 図7 図版九	壺	TC (I)	SD5209		口径: 10.1cm 底径: 5.3cm 器高: 27.3cm	平底を呈し最大腹径を中位に置 く。ほぼ直口する口頸部の端部 を内傾気味に仕上げる。	外面口頸部縦ハケの後端部横ナデ。 体部縦、斜ハケの後肩部に櫛描直線 文。内面指オサエ、ナデ。底面に + 印	色調: 褐色 5YR7/8 ~ 黒色 5YR1.7/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部ほぼ完存 ~ 体部 3/4
52013 図7 図版十	壺	TC (I)	SK5204		口径: 8.2cm 残存高: 6.1cm	逆「ハ」の字状に開く口縁。		色調: 淡褐色 5YR8/4 ~ 灰白色 5YR8/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部~頸部
52014 図7 図版十	甕	TC (I)	SK5206		口径: 16.2cm 残存高: 11.6cm	屈曲気味に短く外反する第1口 縁から外傾する第2口縁を立ち 上げる。口縁は現存2箇所(推 定3箇所)の山形突起を有する。	外面第1口縁は縦ハケ。第2口縁斜 めハケ。体部斜めハケの後櫛描直線 文。	色調: 灰褐色 5YR5/1 ~ にぶい赤褐 色 5YR6/4 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/2 ~ 体部 1/4
52015 図7 図版十	甕	TC (I)	SK5206		口径: 不明 残存高: 2.3cm	外反する第1口縁先端部を短く つまみあげる。	第2口縁外面を横位にハケ仕上げ。	色調: 灰白色 5YR8/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
52016 図7 図版十	鉢	TC (I)	SK5206		口径: 22.0cm 残存高: 6.7cm	体部からゆるやかに外反させて ひらく口縁をもつ。		色調: にぶい褐色 5YR7/4 ~ 灰褐色 5YR4/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/8 ~ 体部

石製品 (52001s ~ 52003s)

出土した石製品について、実測したものは3点である。52001s は打製石鏃、52002s・52003s は磨製石斧である。

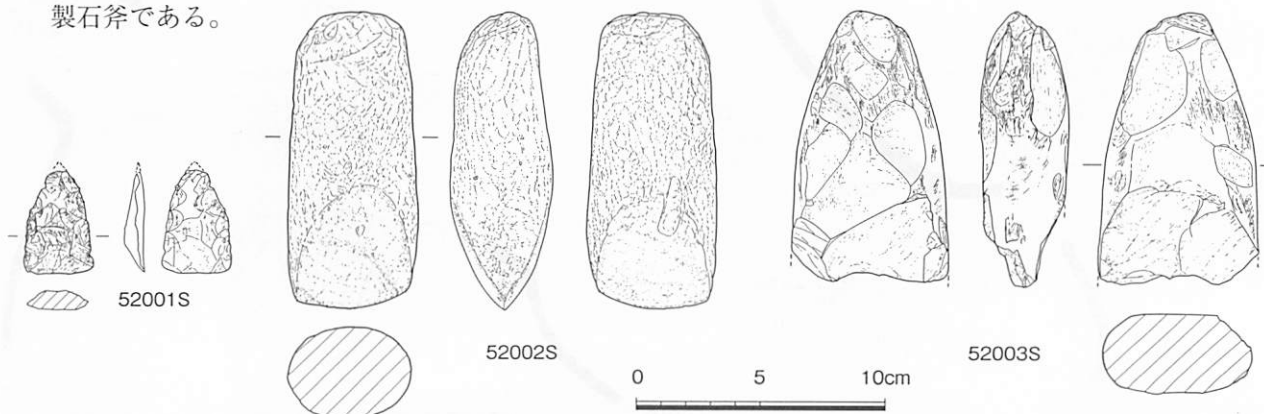


図8 第52次調査出土遺物実測図

表3 出土石製品観察表（第52次調査）

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
52001s 図8 図版十四	打製石鏃	TC (I)	SD5201	小溝の中層	—	41.1	28.1	8	8.6	
52002s 図8 図版九	磨製石斧	TC (I)	SD5209	—	—	121	46	42	405.7	
52003s 図8 図版九	磨製石斧	TB (I)	P5207	—	—	105	62	33	308.6	

木製品（52001w～52004w）

出土した木製品について、実測したものは4点である。いずれも樹種同定は行っていない。52001wは盾である。残存長93cm、残存幅15.1cm、厚さ1.0cmを測る。直径3mm程度の小孔が横方向に11列並ぶ。数か所で綴じ紐の痕跡をとどめるが、孔の内部に繊維質は残存しない。52002wは棒状木製品で、一端を欠損する。残存長103cm、残存幅2.2cm、厚さ1.8cmを測る。芯を外した分割材を用い、側面を面取りしている。建築材の一種か。52003wは榎目材を用いた一本鋤の未成品で、柄の握り部を欠損する。残存長96.0cm、残存幅14.0cm、厚さ3.6cmを測る。52004wは完形の泥除け未成品である。全長25.4cm、幅26.7cm、厚さ2.6cmを測る。幅26cm程度のみかん割り材を原材とし、泥除けの概形を作り出した段階である。

その他の木質遺物については、人為的加工の少ないものが多いため、表4に一覧掲載を付してその概要を示した。

(8) 小結

今回の調査成果のなかで、特記しておくべき事を整理すると以下の様になる。

1. 調査区の西端で方形周溝基が1基検出された。周辺にはさらに溝が広がっているため、墓群を形成している可能性が高い。
2. 調査区の東側から西側に向けて大溝が掘られていて、隣接地の過去の調査を合わせると3条以上の大溝が同一方向に向けて掘られていることがうかがえる。また、南から北に向けて水を流したと思われる小溝があり、その小溝は上記の3条の大溝と連けいを持って用排水の機能を持っていた可能性が高い。

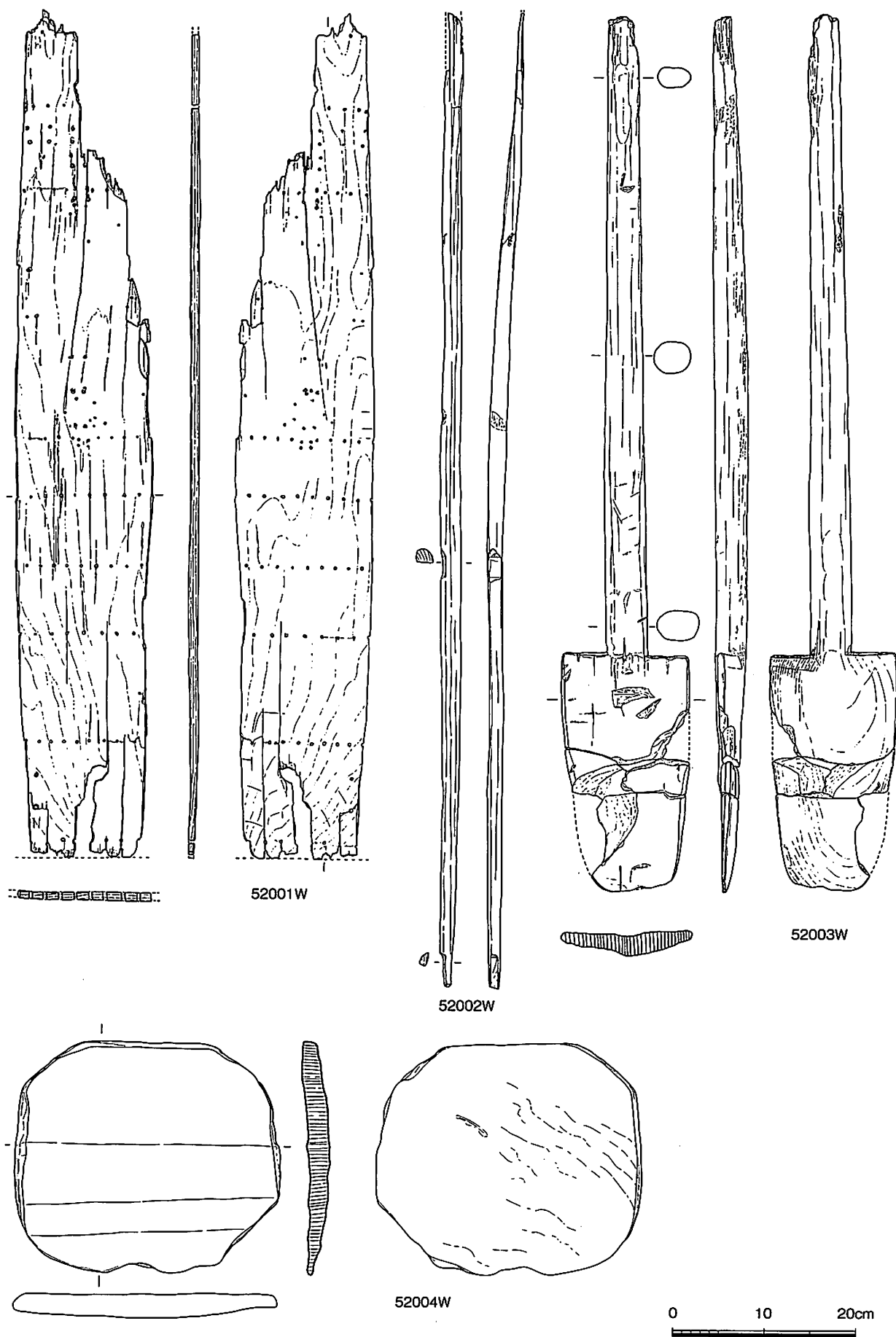


図9 第52次調査出土遺物実測図

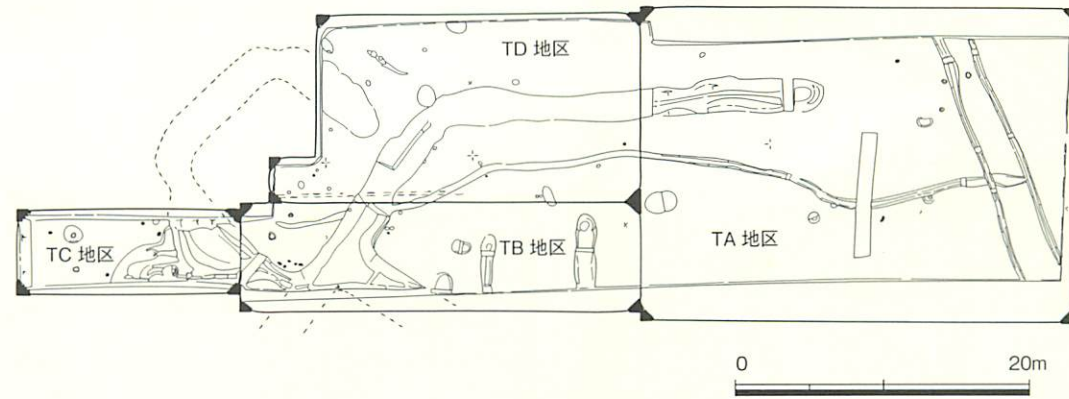
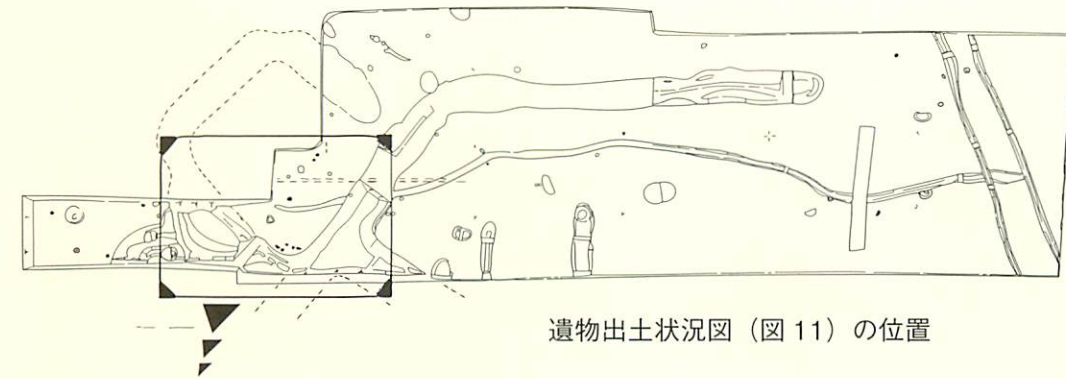


図 10 第 52 次調査区配置図



遺物出土状況図（図 11）の位置

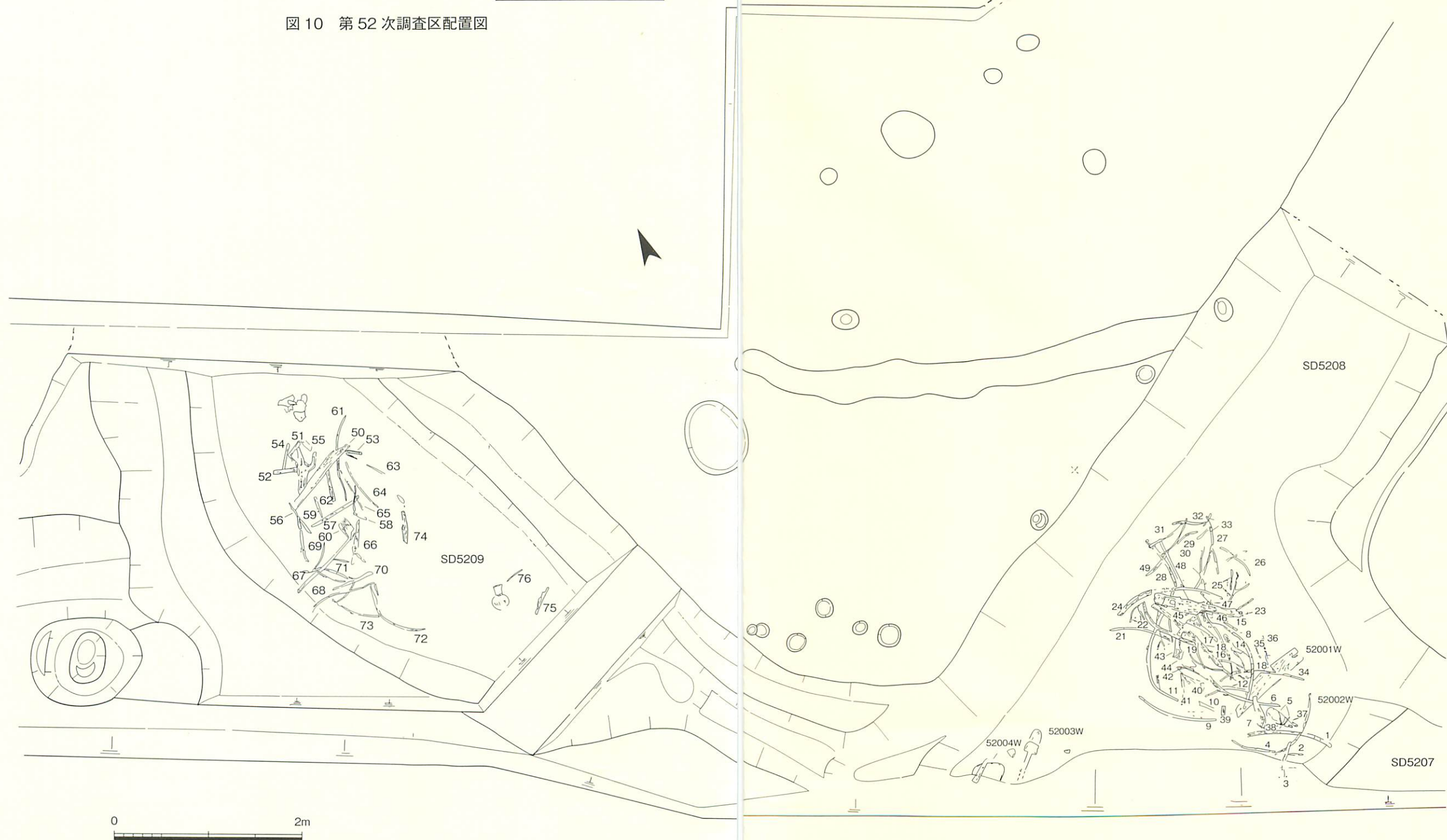


図 11 第 52 次調査 SX5201 遺物出土状況図

表4 出土木材観察表 (第52次調査)

整理番号	器種	調査区	遺構	層位	法量	備考()内は 目視による所見	木取り
w52001	盾	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	長: 93cm 幅: 15.1cm 厚: 1cm		板目
w52002	棒材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	長: 103cm 幅: 2.2cm 厚: 1.8cm		割材削出
w52003	一木 鋤	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	長: 96cm 幅: 14cm 厚: 3.6cm	未成品	柱目
w52004	泥除 け	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	長: 25.4cm 幅: 26.7cm 厚: 2.6cm	未成品	柱目
1	枝材	T A (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 84cm	(針葉樹)	芯持丸木
2	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 40cm	(針葉樹)	芯持丸木
3	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 48cm	(針葉樹)	芯持丸木
4	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 48cm	(針葉樹)	芯持丸木
5	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 18cm	(針葉樹)	芯持丸木
6	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 50cm	(針葉樹)	芯持丸木
7	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 5cm 残存長: 33cm	(広葉樹)、炭化	芯持丸木
8	枝材	T B (1)	SD-8	最下層	径: 2cm 残存長: 83cm	(針葉樹)	芯持丸木
9	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 83cm		芯持丸木
10	枝材	T B (1)	SD-8	最下層	径: 1.5cm 残存長: 12cm	(広葉樹)	芯持丸木
11	枝材	T B (1)	SD-8	最下層	径: 3cm 残存長: 140cm	(針葉樹)	芯持丸木
12	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 40cm	(針葉樹)	芯持丸木
13	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 12cm		
14	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 23cm	(広葉樹)	芯持丸木
15	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 28cm	(針葉樹)	芯持丸木
16	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 48cm	(針葉樹)	芯持丸木
17	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 3cm 残存長: 33cm	(針葉樹)	芯持丸木
18	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 4cm 残存長: 166cm	(針葉樹)	芯持丸木
19	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 3.5cm 残存長: 155cm	(針葉樹)	芯持丸木
20	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 17cm	(針葉樹)	芯持丸木
21	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 60cm	(針葉樹)	芯持丸木
22	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 30cm	(針葉樹)	芯持丸木
23	割材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	最大幅: 19cm 残存長: 95cm	(針葉樹)、納孔 あり	割材
24	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 4cm 残存長: -cm		
25	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 20cm	(針葉樹)	芯持丸木
26	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 70cm	(針葉樹)	芯持丸木
27	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 192cm	(針葉樹)	芯持丸木
28	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 55cm		
29	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 38cm	(針葉樹)	芯持丸木
30	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1.5cm 残存長: 50cm	(針葉樹)	芯持丸木
31	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 60cm	(針葉樹)	芯持丸木
32	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 65cm	(針葉樹)	芯持丸木
33	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 15cm	(針葉樹)	半割
34	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 80cm	(針葉樹)	芯持丸木
35	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 1cm 残存長: 23・11cm	(針葉樹)	芯持丸木

整理番号	器種	調査区	遺構	層位	法量	備考()内は 目視による所見	木取り
36	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 2cm 残存長: 15cm	(広葉樹)	芯持丸木
37	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 3cm 残存長: cm		芯持丸木
38	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 3cm 残存長: cm		芯持丸木
39	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 4cm 残存長: cm		芯持丸木
40	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 4cm 残存長: cm		芯持丸木
41	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 3cm 残存長: 40cm	(針葉樹)	芯持丸木
42	半割 材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 5cm 残存長: 26cm	(ハンノキ?)	半割材
43	枝材	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: 4cm 残存長: 70cm	(針葉樹)、樹の つけ根	芯持丸木
44	—	T B (1)	SD-8	青灰色土 (下層)	径: cm 残存長: 30cm		
45	枝材	T B (1)	SD-8	最下層	径: 1.5cm 残存長: 7cm		芯持丸木
46	枝材	T B (1)	SD-8	最下層	径: 1.5cm 残存長: 20cm		芯持丸木
47	枝材	T B (1)	SD-8	最下層	径: 2.5cm 残存長: 15cm	(広葉樹)	芯持丸木
48	—	T B (1)	SD-9	最下層	径: cm 残存長: cm		
49	枝材	T B (1)	SD-8	最下層	径: 1cm 残存長: 45cm		芯持丸木
50	半割 材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 9cm 残存長: 90cm	(広葉樹)	半割
51	枝材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 4cm 残存長: 30cm	(広葉樹)、炭化	芯持丸木
52	—	T B (1)	SD-9	最下層	径: cm 残存長: cm		
53	—	T B (1)	SD-9	最下層	径: cm 残存長: cm		
54	枝材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 2cm 残存長: 32cm	(広葉樹)	芯持丸木
55	割材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 4cm 残存長: 10cm	(広葉樹)	
56	枝材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 4cm 残存長: 42cm		芯持丸木
57	枝材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 2cm 残存長: 58cm	(広葉樹、サク ラ?)	芯持丸木
58	枝材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 3cm 残存長: 15cm	(広葉樹、サク ラ?)	芯持丸木
59	枝材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 3cm 残存長: 29cm	(広葉樹、サク ラ?)	芯持丸木
60	板材	T B (1)	SD-9	最下層	径: 9cm 残存長: 13cm	(針葉樹)	
61	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 2cm 残存長: 102cm	(針葉樹)	芯持丸木
62	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 2cm 残存長: 20cm	(広葉樹、サク ラ?)	芯持丸木
63	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 1cm 残存長: 32cm	(針葉樹)	芯持丸木
64	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 1cm 残存長: 80cm	(針葉樹)	芯持丸木
65	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 1.5cm 残存長: 30cm	(針葉樹)	芯持丸木
66	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 3cm 残存長: 40cm	(広葉樹)	芯持丸木
67	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 2cm 残存長: 87cm	(針葉樹)	芯持丸木
68	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 1.5cm 残存長: 74cm	(針葉樹)	芯持丸木
69	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 2.5cm 残存長: 40cm	(針葉樹)	芯持丸木
70	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 2cm 残存長: 98cm	(針葉樹)	芯持丸木
71	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 2cm 残存長: 48cm	(針葉樹)	芯持丸木
72	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 2cm 残存長: 75cm	(針葉樹)	芯持丸木
73	—	T B (1)	SD-9	下層	径: 1.5cm 残存長: 20cm	(針葉樹)	
74	半割 材	T B (1)	SD-9	下層	径: 3cm 残存長: 33cm	(針葉樹)	半割
75	割材	T B (1)	SD-9	下層	径: 4cm 残存長: 36cm	(針葉樹)	
76	枝材	T B (1)	SD-9	下層	径: 1cm 残存長: 20cm	(針葉樹)	芯持丸木



図 12 第 52 次調査周辺調査成果図 (本文参考図)

2. 第53次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷三丁目
字皆広 640-1 番地
- (2) 調査期間 平成 15 年 11 月 19 日
～ 16 年 2 月 13 日
- (3) 調査面積 約 1,000㎡
- (4) 担当者 川畑和弘
- (5) 調査経緯と方法

第53次の調査場所は、環濠集落の南西側に位置し、集落を取り囲む環濠が周回していると予測される部分である。調査は、遺構保護を前提として、指定に向けて遺構の広がりと内容を把握することを目的に重要遺跡範囲確認調査を実施することとした。

調査区は対象地の東側（TA 地区）と西側（TB 地区）の二か所に分けて行い、後者については遺構の掘削は一切行わず、平面検出に止めた。前者については、検出された3本の環濠をそれぞれ一部断割り掘削を行い、環濠の堆積状況を確認する調査を実施した。

遺構の検出作業には、表層土（耕土）の除去に重機（バックホー 0.4㎡）を利用し、その後、人力による遺構面精査を行った。遺構調査は、検出した溝の一部を断ち割り、断面観察で溝の埋没状態を観察した後に、断面実測、写真撮影、平板測量（1/50 縮尺）の平面図を作成し、その後、埋め戻し旧状（地下保存）に還した。

(6) 検出遺構

遺構検出は、現耕作土の直下約 25～30cmにある黄灰色極細砂質シルト土の上面で行なった。同一面で検出された遺構には、灰白色の砂質土が充填したものと褐色系の極細砂～シルト土が充填したものの2種に大別できた。前者は、近世以降の土坑や木杭跡で極少数（3か所程度）で、後者のほとんどが弥生時代の遺構で大半を占める。

SD5301（第1環濠）

SD5301 は、調査区北辺で検出された環濠で幅約 5.5 m、深さ約 190cm を測る。断面形状は緩やかなU字形を呈している。図15を参照にして環濠内の土砂の堆積を概略説明すると以下のとおりである。まず、環濠開削の当初期の堆積物は、土層 16 にあたり極め細かな粘質土が水中に沈殿する状態で堆積している。この土層には土器や木器などはほとんど含まれず、若干の自然遺物が認められる状態で人為的攪乱などが無い、純粋な自然堆積の様相を示す。土層 12～15 は、植物遺体などの有機質を含

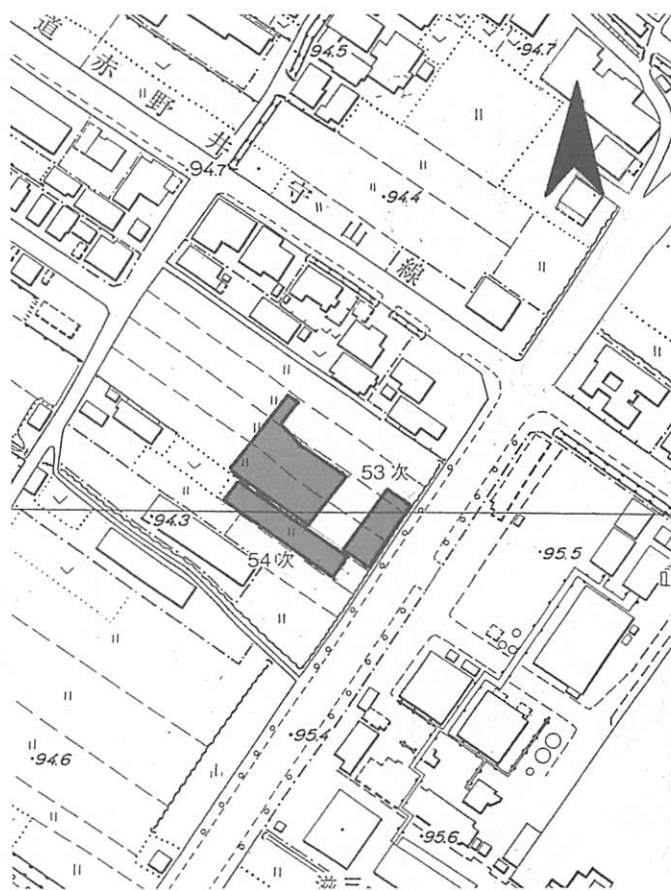


図 13 第53・54次調査位置図

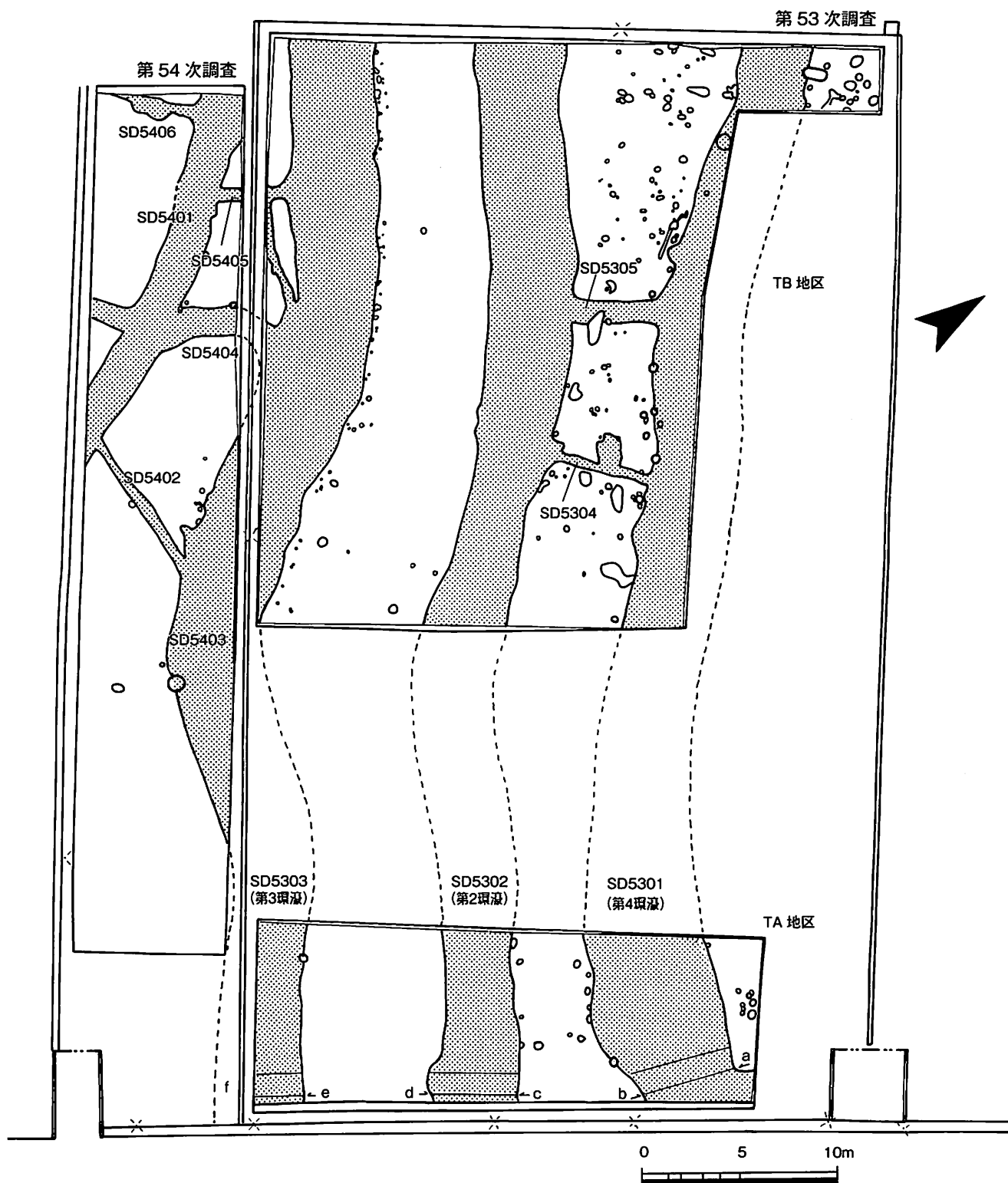


図 14 第 53・54 次調査全体図

んだ土層で、特に土層 12・13 には多量の腐植物が混入しており、その主体は樹木の枝葉や人の手が加わった木材片によって構成されている。この土層から上位には、9 層に若干分解の進んだ有機質土が認められるものの、植物枝葉などは含まれていない。環濠の埋没土砂で土層 5・6・7 と土層 8 の境界ラインで層相は大きく変わる。8 層までは、水中に土砂が沈殿し、堆積したもので、それより上位は人為的崩落土や一過性の雨水や流水により埋まった土の可能性が高い。特に土層 6～7 については周辺土砂の崩落土もしくは人為的な埋土の可能性がある。土層 13 は川床堆積物に類似する堆積土で、一時的にしろ水流をもって流れた痕跡と言えよう。その後の堆積は 1～3 については、いずれも類似する土層で同条件で埋没が進んだ結果と捉えられる。当地点の土砂堆積の状況からは、環濠の縁に想定される土塁の存在は確認しにくい、想定するならば土層 6・7 などがその可能性を持っている。

出土土器から SD5301 の埋没時期を検討すると、土層 7 より下位で出土した土器とそれより上位の土層 1 から 6 で検出された土器には形式差が認められる。前者においては、在地系土器の口縁端部にはヨコナデ手法は認められない（第Ⅳ様式前葉）が、土層 6 より上位では、端部外面にナデ消しや波状文などの施文が認められる（第Ⅳ様式中葉以降）。

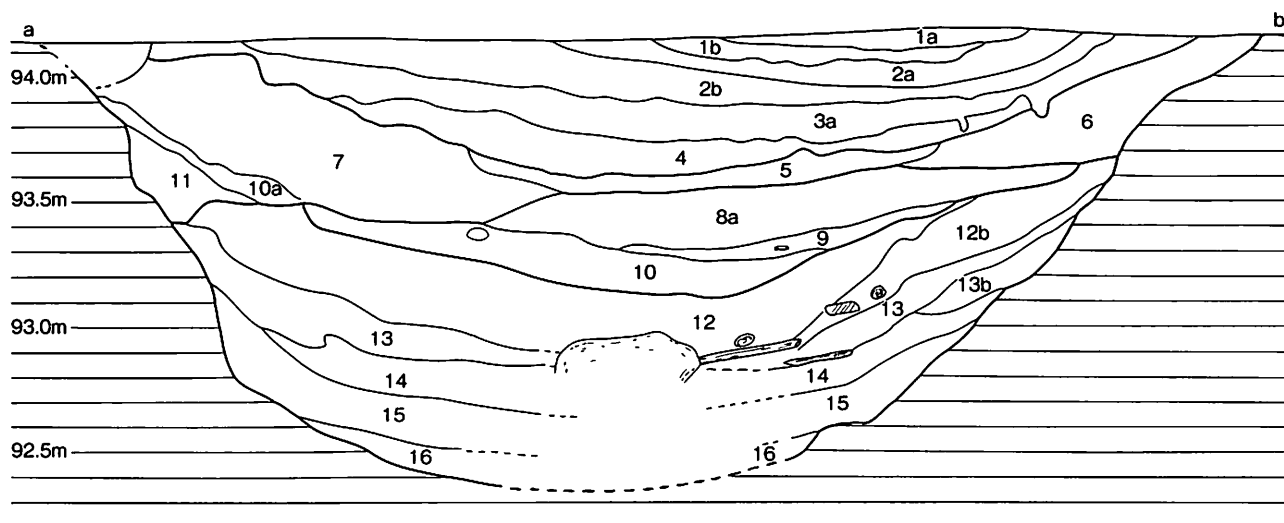
SD5302（第2環濠）

SD5302 は、3 条で周回する環濠のうちで内側から 2 本目に位置するものである。幅は約 6 m、深さ約 130cm を測り、断面形状は緩やかな U 字形をしている。環濠内の土層堆積を概略説明すると以下のとおりである。まず、環濠開削後の当初期の堆積物は土層 7・8（最下層）である。土層 8 はきめ細かな粘質土が水中に沈殿する状態で堆積しており、砂はほとんど含んでいない。土層 7 には土器や木器などはほとんど含まれず、若干の自然遺物（ドングリ・葉）が認められる。葉っぱの堆積状況は、ほぼ水平で乱れた状態ではない。土層 6（下層）は、有機質を多く含んだ土層で、腐植物が混入しており、その主体は樹木の枝葉や人為の加わった木材片によって構成されている。土層 5a・5b は、有機質が含まれるが分解が著しく、葉っぱは形状をとどめるものはない。環濠 SD5302 の埋没土のなかでは、土層 2・3・4 と土層 5 の境界ラインで様相が大きく異なる。5 層までは、水中に土砂が沈殿してできた沈水堆積物で、それより上位は人為的崩落土や一過性の雨水や流水により埋まった土の可能性が高い。土層 4 は、ほかに比して砂質が強く、雨水などによる流れ込みの混入土の可能性もある。土層 4 の下面には、平坦な地山が所在しておりテラス状の中段（犬走り？）が確認できる。土層 3a・3b・3c は、いずれも炭化粒を含むシルト質土で両岸からの崩落土の可能性が高く、非常に固くしまっている。土層 3 より上位には、土層 2a・2b・2c と土層 1a・1b とに大別できる。いずれもシルトを基調にしたもので、2c はやや荒い極細砂を含んでおり一時的な流水などの痕跡かもしれない。

SD5303（第3環濠）

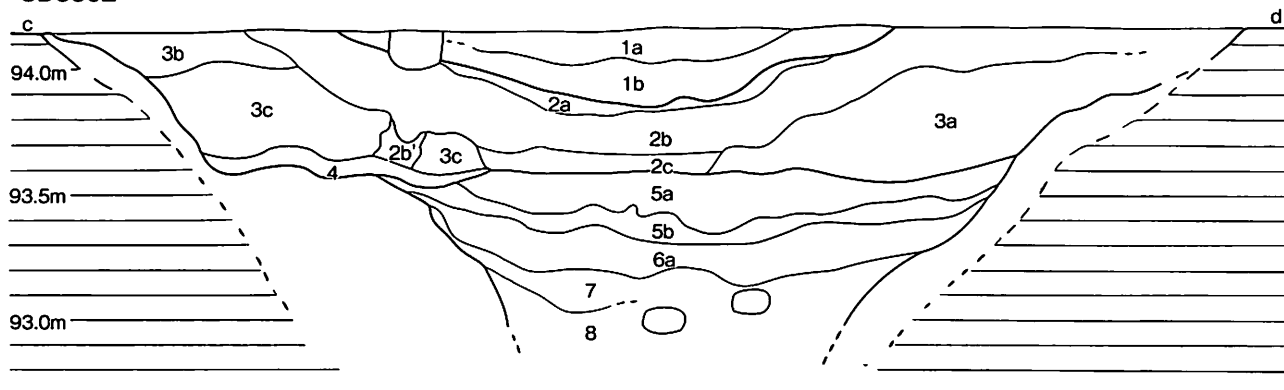
SD5303 は、3 条で周回する環濠のうちで一番外側に位置するものである。幅は 5 m 程度で、深さ約 140cm を測り、断面形状は緩やかな U 字形をしている。環濠内の土層堆積を概略説明すると以下のとおりである。まず、環濠開削後の当初期の堆積物は土層 7（最下層）で、極め細かな粘質土が水中に沈殿する状態で堆積している。土層 5 から土層 6b については、粘質土を基本としているが、植物遺体を含んでいる土層で、特に 5 層は植物遺体を多く含んでいる。層相が大きく変わるのは、土層 2b・3b と土層 4a の境界ラインである。土層 4a までは、水中に土砂が沈殿してできた沈水堆積物で、それより上位は人為的崩落土や一過性の雨水や流水により埋まった土の可能性が高い。土層 3a・3b

SD5301



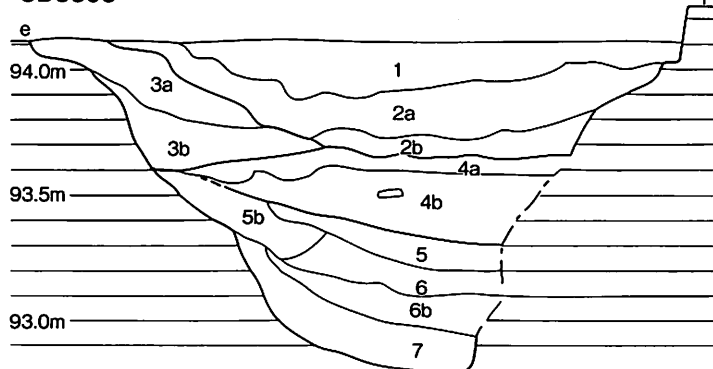
- 1a. 黄灰色 2.5Y5/1 極細砂混じりシルト
 1b. 黄灰色 2.5Y4/1 極細砂混じりシルト
 2a. 灰黄褐色 10YR4/2 極細砂混じりシルト
 2b. 褐灰色 10 Y R4/1 極細砂混じりシルト
 3a. 灰黄褐色 10YR4/2 極細砂混じりシルト
 4. 暗黄褐色 2.5Y5/2 シルト+粘質土 (ブロック状) 小片遺物
 5. にぶい黄褐色 10YR5/4 極細砂混じりシルト
 6. にぶい黄褐色 10YR7/4 極細砂混じりシルト
 7. にぶい黄色 2.5Y6/4 極細砂混じりシルト
 8a. 灰色 7.5Y5/1 粘質シルト (炭化粒混じる)
 9. 暗黄褐色 2.5Y4/2 有機分解土
 10. オリーブ灰色 2.5GY5/1 粘質土
 10a. オリーブ黒色 5Y3/1 極細砂 (炭化粒混じる)
 11. 灰色 5Y5/1 シルト質極細砂
 12. オリーブ灰色 2.5GY5/1 有機質シルト
 13. 灰色 7.5Y5/1 有機質シルト
 14. 灰色 5Y4/1 有機混じり粘質土
 15. オリーブ灰色 5GY5/1 有機混じり粘質土
 16. 緑灰色 7.5Y5/1 粘質土

SD5302



- 1a. 黄灰色 2.5Y5/1 極細砂混じりシルト
 1b. 褐灰色 10YR5/1 極細砂混じりシルト
 2a. 褐灰色 10YR4/1 極細砂混じりシルト
 2b. 褐灰色 7.5YR4/1 極細砂混じりシルト
 2c. 暗黄褐色 2.5Y5/2 極細砂混じりシルト (流れ込み混入土)
 3a. にぶい黄褐色 10YR6/4 極細砂混じりシルト (炭化粒若干含む)
 3b. 灰黄褐色 10YR5/2 シルト質極細砂
 3c. にぶい黄色 2.5Y6/3 極細砂混じりシルト (炭化粒少量含む)
 4. 黄灰色 2.5Y5/1 シルト質極細砂
 5a. オリーブ灰色 5GY6/1 シルト質粘土
 5b. オリーブ灰色 2.5GY6/1 シルト質粘土 (有機質含む)
 6a. 灰黄褐色 10YR5/2 有機質混じりシルト (有機質含む)
 7. オリーブ灰色 5GY6/1 シルト質粘土 (どんぐり、葉を含む)
 8. 緑灰色 10GY6/1 シルト質粘土

SD5303



1. 暗黄褐色 2.5Y5/2 シルト質極細砂
 2a. 黄褐色 2.5YR5/3 極細砂混じりシルト
 3a. にぶい黄色 2.5Y6/3 極細砂混じりシルト
 3b. 黄褐色 2.5Y5/3 極細砂混じりシルト (炭化粒)
 4a. 明黄褐色 10YR6/6 極細砂混じり粘質土
 4b. オリーブ灰色 2.5GY5/1 有機混じりシルト粘質土
 5. オリーブ褐色 2.5Y4/4 有機質粘土
 5b. 灰オリーブ 7.5GY5/2 有機混じり粘質土
 6. オリーブ灰色 10Y5/2 有機混じり粘質土
 6b. 灰オリーブ 5Y5/2 有機混じりシルト粘質土
 7. オリーブ灰色 5GY6/1 シルト質粘土

0 1m

図 15 第 53 次調査検出遺構断面図

は、炭化粒を含むシルト質土で環濠岸からの崩落土の可能性が高く、非常に固くしまっている。土層 3 より上位に位置する土層 2a・2b、土層 1 についてはいずれもシルト質の類似する土層で、同条件で埋没が進んだ結果と捉えられる。

(7) 出土遺物

SD 5301 (第 1 環濠)

幅約 1 m の狭隘な土層観察ベルト内から弥生土器（コンテナ 4 箱分）と木製品、自然遺体などが出土している。ここでは、図示可能なものを掲示しておく。

土器 (53001 ～ 53035)

図示した土器は 35 点。そのうち壺は 13 点。甕は 17 点。高坏は 3 点。鉢は 2 点を数える。壺を大別すると広口壺 (53001 ～ 53005) 5 点、有段口縁壺 (53006 ～ 53009) 4 点、直口壺 (53010・53011) 2 点、壺底 (53012・53013) 2 点である。甕は 17 点中、在地系の受口状口縁甕が 16 点、搬入品の可能性がある「く」の字状口縁甕 (53030) が 1 点で、前者の受口状口縁のうち第 1 口縁端部外面の調整手法は大きく 3 つが看取される。1 つは、全面を斜位に荒い刷毛を施すもの。2 つは、全面を斜位に荒い刷毛を施した後に端部上半をツマミ、横ナデを施しているもの。3 つは、斜位に荒い刷毛を施した後に、その全面をナデ消しして施文等を加えているもの。この中で 3 つ目の手法を用いているものは、土層 6 よりも上層に限って認められるものである。高坏の 3 点のうち、口縁部が確認できるものは 2 点で、いずれも水平口縁を持っている。

SD 5302 (第 2 環濠)

SD 5301 と同様に幅約 1 m の土層観察ベルトを設定して断ち割り調査を実施した。この地点から弥生土器（コンテナ 2 箱分）が検出された。

土器 (53036 ～ 53055)

SD5302 から出土した土器で掲示したものは、20 点を数える。そのうち壺が 8 点。壺蓋が 1 点。甕が 9 点。高坏が 1 点。鉢が 1 点を数える。壺 8 点の内訳は、広口壺が 4 点、凹線文系の有段口縁壺 (53042・53043) が 2 点、在地系大型壺 (53041) が 1 点、細頸壺 1 点を数える。甕は図示した 9 点の全てが在地系の受口状口縁甕である。この中で、第 1 口縁端部外面の調整で、全面を斜位に荒い刷毛を施したものは認められなかった。また、最上層にあたる土層 1 からは、斜位に荒い刷毛を施した後に、その全面をナデ消しして櫛描列点文を加えた甕 (53045) が出土している。

SD 5303 (第 3 環濠)

調査区の南隅で幅約 1 m の土層観察ベルトを設定して断ち割り調査を実施した。環濠幅全てを検出することは出来なかった。この地点から弥生土器（コンテナ 1 箱分）が検出された。

土器 (53056 ～ 53059)

SD5303 から出土した土器で掲示したものは、4 点である。そのうち壺が 3 点、甕が 1 点である。壺 3 点の内訳は、凹線文系の大型有段口縁壺 (53056) が 1 点、直口壺 (53057) が 1 点、細頸壺 (53058) が 1 点である。甕は在地系の受口状口縁甕 (53059) で、第 1 口縁内面に列点文をもつものである。

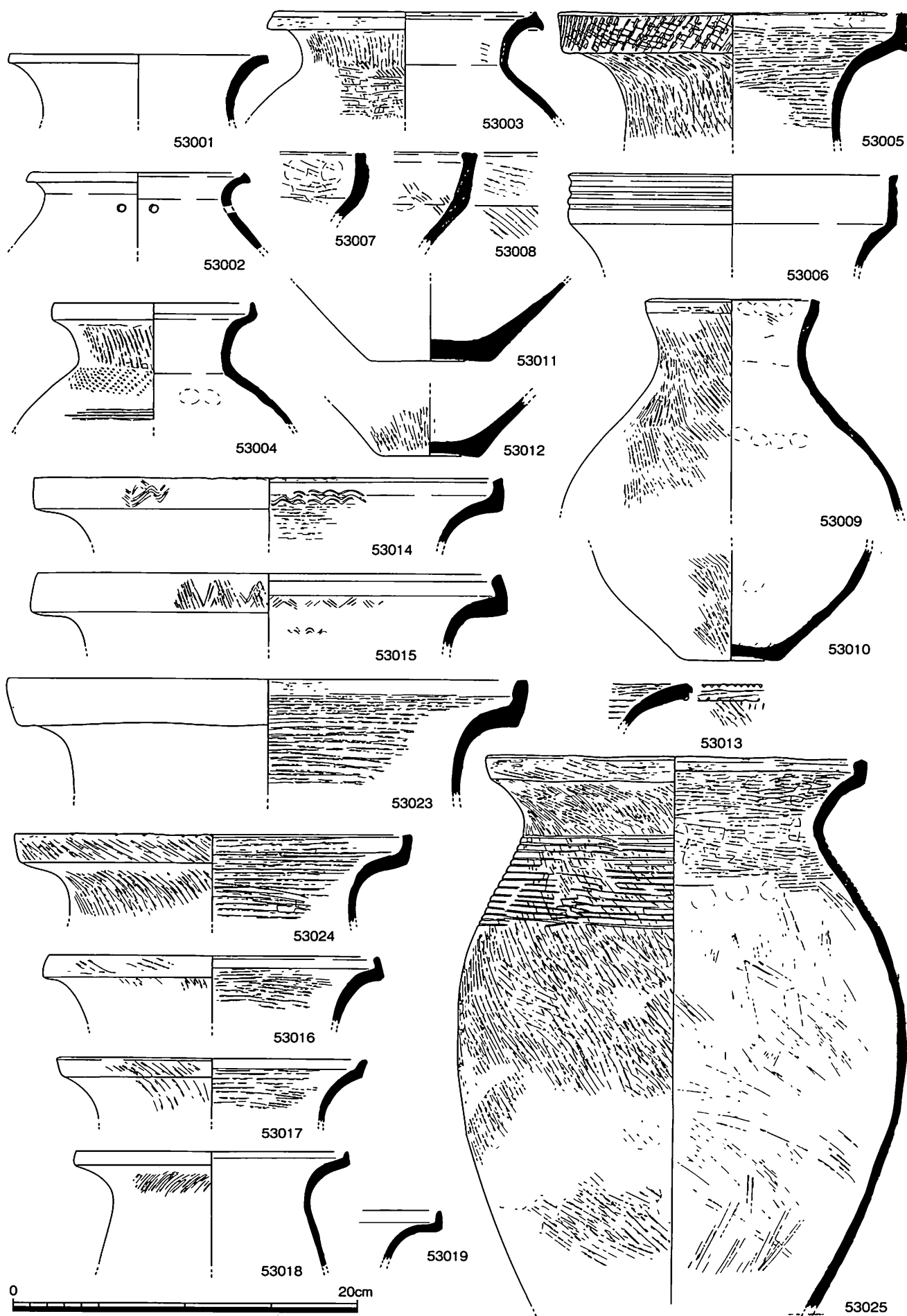


図 16 第 53 次調査出土遺物実測図

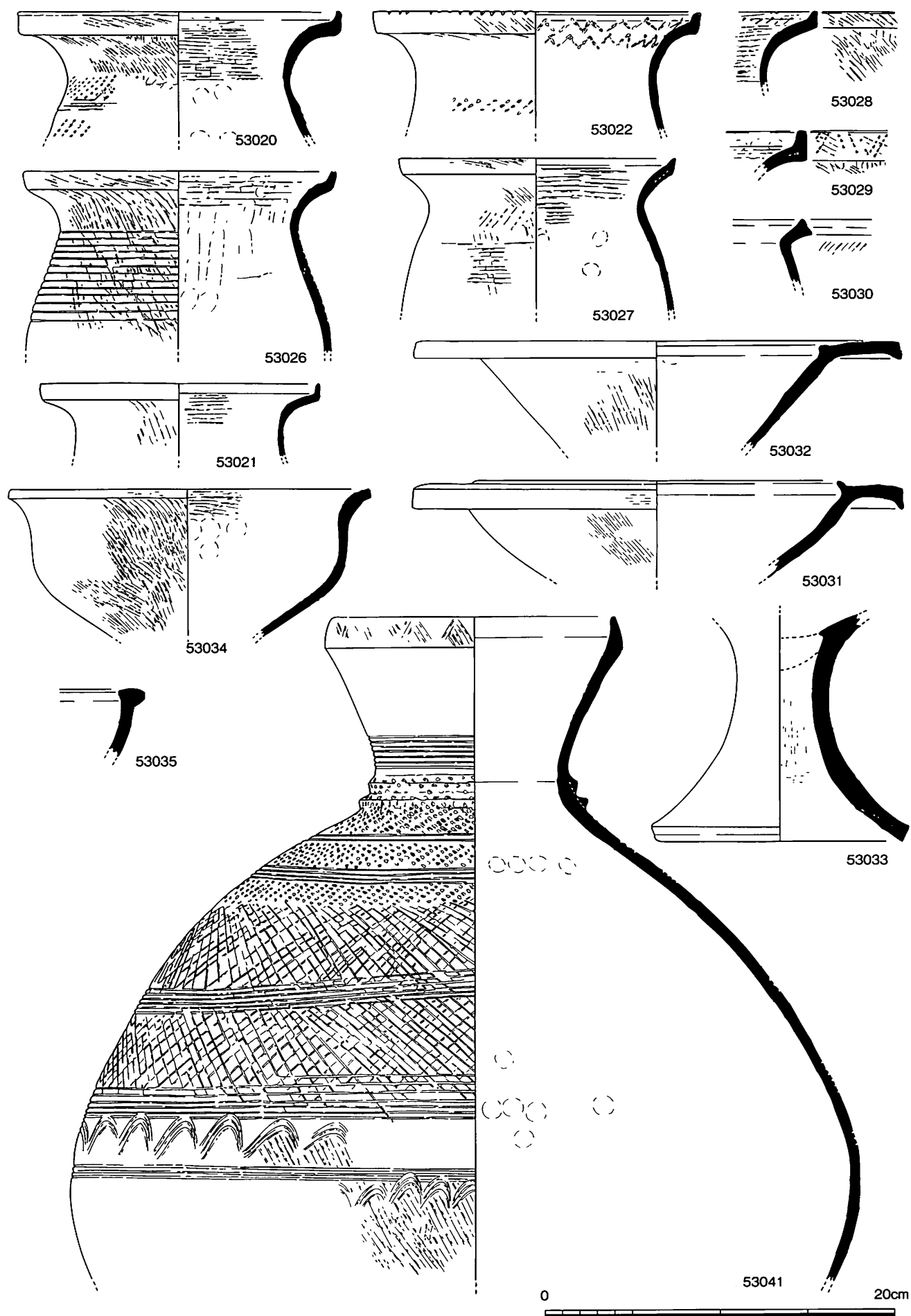


図 17 第 53 次調査出土遺物実測図

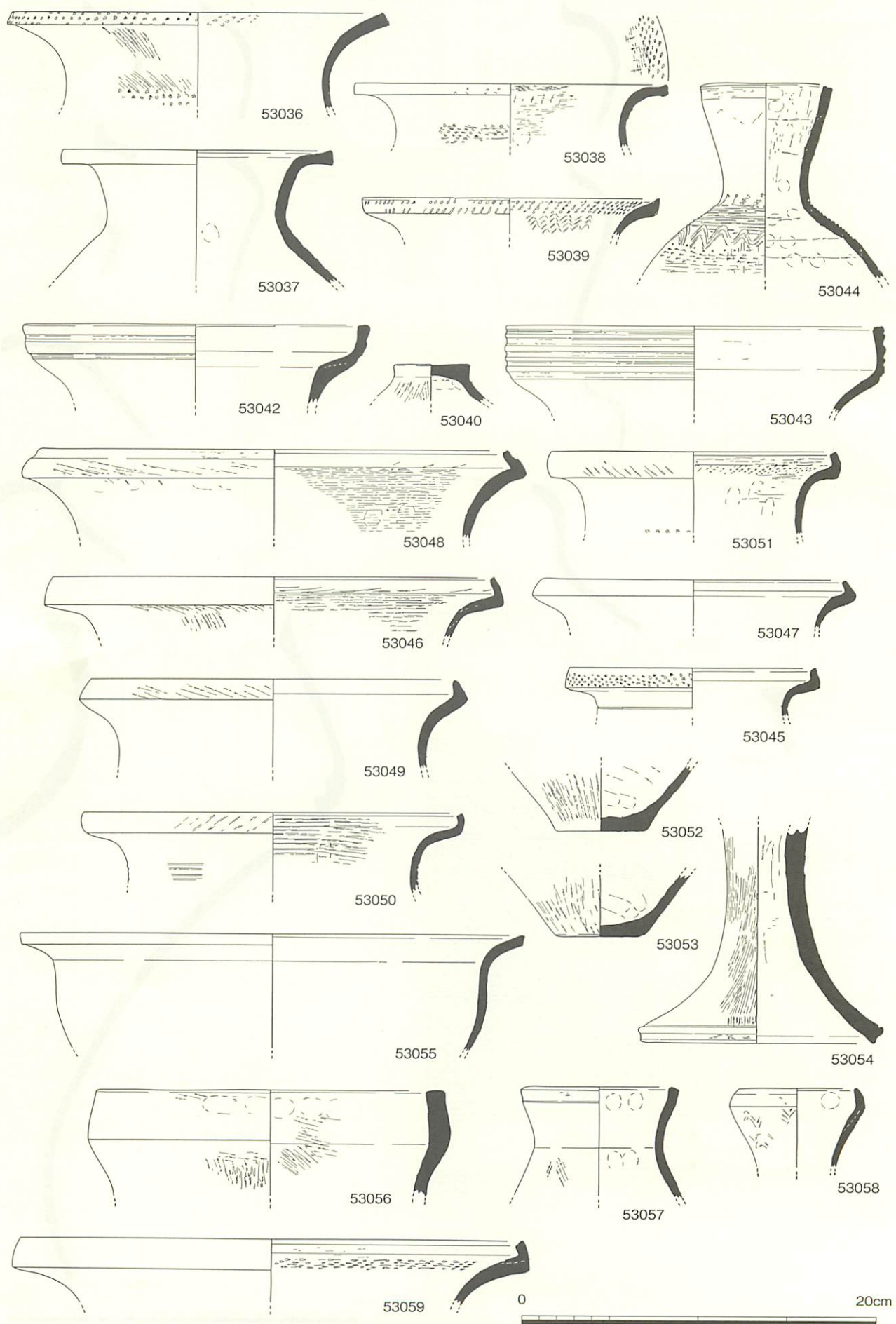


図 18 第 53 次調査出土遺物実測図

表5 出土土器観察表 (第53次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調 / 胎土 / 焼成	備考
53001 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	3層	口径: 15.0cm 残存高: 3.8cm	緩やかに外反して端部はやや内傾気味の面をなす。		色調: にぶい赤橙色 10YR6/4 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/4
53002 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	12層	口径: 12.4cm 残存高: 4.4cm	口縁部短く外反して端部は内外に肥厚し内傾する面をなす。	頸部に穿孔残存 1	色調: 浅黄色 7.5YR8/3 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/8 ~ 体部若干
53003 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	7層	口径: 15.2cm 残存高: 6.2cm	外反する口縁の端部が内外に肥厚し内傾する面をなす。	外面体部ハケの後タタキ。口頸部縦ハケ。端面横ナデ。内面口縁端部強い横ナデ。	色調: 灰白色 10YR8/2 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/2 ~ 体部若干
53004 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	12層	口径: 11.6cm 残存高: 7.0cm	やや上開きの筒状の頸部から屈曲気味に外反して内面に段を持ち、さらに第2口縁を立ち上げる。	外面体部描列点文、横線文。頸部縦ハケ。内面体部に指オサエ。口縁ナデ。	色調: 灰白色 10YR8/1 胎土: 2mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/3 ~ 体部 1/5
53005 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	11、12層	口径: 20.0cm 残存高: 7.4cm	大きく外反する第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。	外面第1口縁縦、斜ハケを重ねる。第2口縁斜めハケを重ねた後、ハケ状工具による刻目文を施す。内面第1口縁は横ハケ、第2口縁はナデ。	色調: 明褐色 7.5YR7/2 ~ 褐色 7.5YR4/1 胎土: 1mm 角の石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/2 ~ 頸部
53006 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	ポンプ孔	口径: 19.0cm 残存高: 5.4cm	緩やかに外反した口縁が角度を変えて垂直に立ち上がる。	外面に凹線 3 条 (4 条かも)	色調: 淡褐色 5YR8/4 胎土: 1mm 角の石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/8
53007 図 15 図版十五	大型有段口縁壺	TA (I)	SD5301	2層	口径: 不明 残存高: 5.3cm	外傾気味に第2口縁を立ち上げる。端部は内外に肥厚し水平な凹面をなす。	外面斜めハケ。内面ナデ。	色調: 明褐色 7.5YR7/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
53008 図 15 図版十五	大型有段口縁壺	TA (I)	SD5301	2層	口径: 不明 残存高: 5.6cm	内湾気味の第2口縁を立ち上げる。端部は水平面。	外面に凹線。内面指オサエ、ハケ。	色調: にぶい褐色 7.5YR7/3 胎土: 微石粒を含む。まれに 1.5mm 角の石粒 焼成: 良好	口縁部若干
53009 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	12層	口径: 10.0cm 残存高: 12.2cm	肩の張らない体部からやや外上方にのびる口縁部。端部はやや外傾する面。	外面体部から口縁部にかけて斜めハケ。端部を横ナデ。口縁部内面ハケ目、指オサエが残る。	色調: 褐色 10YR7/6 ~ 灰白色 7.5YR8/2 胎土: 2mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 3/4 ~ 体部 1/3
530010 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	11層	底径: 5.2cm 残存高: 6.4cm	やや上げ底。	外面ハケ。内面ナデ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 ~ 褐色 7.5YR4/1 胎土: 1mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	底部 4/5 ~ 体部
53011 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	5層	底径: 7.0cm 残存高: 4.6cm	平底		色調: 褐色 7.5YR7/6 ~ 明褐色 7.5YR7/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	底部 1/2 弱
53012 図 15 図版十五	壺	TA (I)	SD5301	11層	底径: 6.0cm 残存高: 3.4cm	やや上げ底。	外面ハケ。内面ナデ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 ~ 褐色 7.5YR4/1 胎土: 微石粒を多く含む。まれに 2mm 角の石粒 焼成: 良好	底部完存 53004 と同一固体か
53013 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	11層	口径: 不明 残存高: 2.5cm	屈曲気味に外反する口縁部の端部が拡張しほぼ垂直な面を作る。	外面縦斜めハケを重ねる。端面横ハケの後上下端にキザミを施す。内面横ハケ。	色調: 灰褐色 5YR6/2 ~ 黒色 5YR1.7/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
53014 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	ポンプ孔	口径: 27.1cm 残存高: 3.8cm	外反する第1口縁から垂直に第2口縁を立ち上げる。端部は内傾する面をなす。	第1口縁内面と第2口縁外面に波状文。端部外面にキザミ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 ~ 灰褐色 7.5YR6/2 胎土: 1mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/8
53015 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	12層	口径: 27.0cm 残存高: 4.2cm	屈曲気味に外反する第1口縁からやや内傾する第2口縁を立ち上げる。	第1口縁内面と第2口縁外面鋸歯文。(山形文?)	色調: 灰白色 7.5YR8/1 ~ 灰褐色 7.5YR5/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部のみ若干
53016 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	5層	口径: 19.0cm 残存高: 4.0cm	外反する第1口縁からやや内傾する第2口縁を立ち上げる。	外面第1口縁縦、斜めハケ。第2口縁斜めハケ。内面横ハケ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/5
53017 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	7層	口径: 18.0cm 残存高: 3.6cm	外反する第1口縁から外傾する第2口縁を立ち上げる。	外面斜めハケ。内面横ハケ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 ~ 黒褐色 7.5YR2/2 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/5
53018 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	6層	口径: 15.8cm 残存高: 6.7cm	緩やかに外反する第1口縁から内傾気味に短く第2口縁を立上げる。	外面第1口縁斜めハケ。	色調: 褐色 7.5YR4/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/2 ~ 体部
53019 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	4層	口径: 不明 残存高: 2.8cm	大きく外反した第1口縁から垂直に第2口縁を立ち上げる。		色調: 黒褐色 5YR2/2 胎土: 1mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部若干
53020 図 16 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	5	口径: 18.8cm 残存高: 7.3cm	緩やかに外反する第1口縁から垂直に第2口縁を立ち上げる。	外面体部ハケの後描き列点文、描直線文。口頸部ハケ。内面体部指ナデ、指オサエ。口頸部横ハケ。第2口縁ナデ。	色調: 灰白色 10YR8/1 ~ 7/1 胎土: 1mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/2 ~ 肩部 1/4
53021 図 16 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	6層	口径: 16.0cm 残存高: 4.2cm	外反する第1口縁から垂直に第2口縁が立ち上がる。	外面縦ハケ。内面横ハケ。	色調: 灰褐色 7.5YR6/2 胎土: 1.5mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/5
53022 図 16 図版十五	甕	TA (I)	SD5301	7層	口径: 19.0cm 残存高: 6.9cm	外反する第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。	外面口縁部斜めハケの後、端部に刻目を施す。肩部に列点文。内面第1口縁に櫛状工具による山形文。	色調: 灰褐色 7.5YR6/2 ~ 黒色 7.5YR1.7/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
53023 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	11層	口径: 30.0cm 残存高: 6.7cm	緩やかに外反する第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。端部は水平面。	第1口縁内面横ハケ。	色調: 灰白色 10YR8/1 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/8 弱
53024 図 15 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	12層	口径: 23.0cm 残存高: 5.0cm	緩やかに外反する第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。暗部は水平面。	外面に斜ハケを重ね口縁端部に刻目を施す。内面強い横ハケ。	色調: 黒褐色 7.5YR3/1 胎土: 1mm 角まで石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/4

表6 出土土器観察表(第53次調査)

実測番号 採図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調 / 胎土 / 焼成	備考
53025 図15 図版十三	甕	TA (I)	SD5301	11層	口径: 22.0cm 残存高: 32.0cm	上腹部が張る体部から第1口縁が緩やかに外反し第2口縁を外傾気味に立ち上げる。	外面に斜ハケを重ね、肩部に櫛状工具による直線文を入れる内面口頭部横ハケ。体部板目状工具によるナデ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 ~ 黒褐色 7.5YR1.7/1 外面スス付着 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	底部欠損
53026 図16 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	12層	口径: 18.0cm 残存高: 10.3cm	緩やかに外反する第1口縁から外傾気味に第2口縁を立ち上げる。	外面口縁部斜めハケ。口頭部、体部縦、斜めハケ。体部櫛状線文。内面口縁部横ハケおよびナデ。体部指ナデ、指オサエ。	色調: 浅黄褐色 7.5YR8/3 ~ 黒色 7.5YR2/1 胎土: 1.5mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/4 強 ~ 体部 1/10
53027 図16 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	11層	口径: 16.0cm 残存高: 7.8cm	緩やかに外反する口縁部をつまみあげ外側に外傾する面を作る。	外面体部ハケの後、櫛状列点文、櫛状直線文。口縁部斜めハケ。内面体部指ナデ、指オサエ。口頭部横ハケ。	色調: 灰褐色 7.5YR6/2 ~ 黒色 7.5YR2/2 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/2 ~ 体部若干
53028 図16 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	11層	口径: 不明 残存高: 4.5cm	大きく外反した第1口縁から垂直に第2口縁を立ち上げる。	外面第1口縁縦、斜ハケを重ねる。第2口縁斜めハケ。内面横ハケの後第1口縁端に列点文。	色調: にぶい褐色 7.5YR7/3 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
53029 図16 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	11層	口径: 不明 残存高: 2.4cm	第1口縁から垂直に第2口縁を立ち上げる。	外面第1口縁縦、斜めハケを重ねる。第2口縁斜めハケの後櫛状工具で鋸歯文を施す。内面横ハケ及びびなど。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 胎土: 1mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部若干
53030 図16 図版十六	甕	TA (I)	SD5301	11層	口径: 不明 残存高: 3.8cm	「く」の字状に外反して端部は内傾する凹面。	外面頭部にハケ目が残る。	色調: (内) 灰白色 7.5YR8/2 1 (外) 黒褐色 7.5YR3/1 胎土: 1mm 角までの石粒を少量含む 焼成: 良好	口縁部若干
53031 図16 図版十七	高坏	TA (I)	SD5301	7層	口径: 28.1cm 残存高: 5.6cm	水平な口縁の端部を垂下させる。腕部の先端には内傾して立ち上がる凸帯を廻らす。	腕部外面縦ハケ。	色調: 浅黄褐色 10YR8/3 胎土: 1.5mm 角までの石粒を少し含む 焼成: 良好	口縁部 1/8
53032 図16 図版十七	高坏	TA (I)	SD5301	11層	口径: 27.6cm 残存高: 6.2cm	直線的に開く坏部から口縁部が水平に伸び端部は下方につまみ出す。坏先端部に凸帯を廻らす。	外面坏部縦ハケ。	色調: 灰白色 10YR8/2 胎土: 1.5mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	坏部 1/5
53033 図16 図版十三	高坏	TA (I)	SD5301	3層	脚底径: 14.0cm 残存高: 13.1cm	「ハ」の字状に開く脚部。裾端部は内外にやや肥厚し外傾する面をなす。	円盤充填法。内面脚柱部にシボリ痕。	色調: 褐色 2.5YR7/8 胎土: 2mm 角の石粒を多く含む 焼成: 良好	坏部欠損
53034 図16 図版十七	浅鉢	TA (I)	SD5301	11層	口径: 20.8cm 残存高: 8.6cm	口縁部短く緩やかに外反して端部はほぼ垂直に面をなす。	口縁部内面横ハケ。	色調: 灰白色 10YR8/2 ~ 黒褐色 1 10YR2/2 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 ~ 体部にかけて若干
53035 図16 図版十七	鉢	TA (I)	SD5301	11層	口径: 不明 残存高: 3.9cm	内湾する体部の端部が内外に肥厚し(外面に折り返し)水平な面を作る。		色調: 淡褐色 5YR8/3 胎土: 微石粒を含む。まれに大粒の 1 石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
53036 図17 図版十七	壺	TA (I)	SD5302	5a 青灰色・2c	口径: 21.3cm 残存高 5.4cm	緩やかに外反し端部は内外にやや肥厚し、内傾する面をなす。	外面頭部と端面に列点文。内面口縁部に列点文。	色調: 灰白色 7.5YR8/1 胎土: 1.5mm 大までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/5 ~ 頸部若干
53037 図17 図版十四	壺	TA (I)	SD5302	2層	口径 15.2cm 残存高: 7.6cm	大きく外反し端部は内外に肥厚して垂直に面をなす。	内面口縁部強いナデ。	色調: 淡褐色 5YR8/4 胎土: 1mm 大までの石粒を少し含む 焼成: 良好	口縁部 3/4 ~ 体部若干
53038 図17 図版十七	壺	TA (I)	SD5302	5層	口径: 18.0cm 残存高: 3.5cm	大きく外反して端部は垂直な面をなす。	外面頭部と端面に列点文。内面口頭部横ハケの後端部に列点文。	色調: 褐色 7.5YR6/2 ~ 黒色 7.5YR1.7/1 胎土: 1.5mm 大までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/12 ~ 頸部若干
53039 図17 図版十七	壺	TA (I)	SD5302	5層、2層	口径: 17.0cm 残存高: 2.1cm	外反する口縁部の端部を内側につまみ出し、ほぼ垂直な面をなす。	端部外面に列点文。内面に列点文、波状文。	色調: 明褐色 7.5YR7/2 ~ 黒褐色 1 7.5YR2/1 胎土: 1mm 角までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/3 弱
53040 図17 図版十七	蓋	TA (I)	SD5302	5a 青灰色	天井径: 4.5cm 残存高: 2.2cm		外面ハケ。内面ナデ。	色調: 褐色 10YR4/1 胎土: 1mm 大までの石粒を含む 焼成: 良好	天井部完存
53041 図16 図版十三	壺	TA (I)	SD5302	2層		腹部大きく膨らむ。口縁部は細い頸部から逆ハの字状に開き端部で角度を変え内傾して立ち上がる。頸部に断面三角形の貼付凸帯。	外面ハケ目調整後櫛状直線文、櫛状列点文、斜格子文、波状文を施す。内面ナデ。	色調: 10YR8/1 胎土: 1mm 大の石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/2 ~ 体部 1/2
53042 図17 図版十七	壺	TA (I)	SD5302	2層	口径: 19.6cm 残存高: 4.5cm	外反する第1口縁から内湾気味に第2口縁を立ち上げる。端部は水平な面。	第2口縁外面に凹線。	色調: 褐色 5YR7/6 胎土: 1.5mm 大までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/6
53043 図17 図版十七	壺	TA (I)	SD5302		口径: 21.4cm 残存高: 4.9cm	緩やかに外反する口縁をほぼ垂直に立ち上げる。端部は水平な面。	口縁部外面に凹線 5 条。	色調: 浅黄褐色 7.5YR8/3 胎土: 1mm 大までの石粒を少し含む 焼成: 良好	口縁部 1/8
53044 図17 図版十四	壺	TA (I)	SD5302	6層	口径: 7.4cm 残存高: 11.0cm	口頭部は外上方にまっすぐに伸び端部はほぼ水平な面をなす。	外面口縁部端部に横ナデ。体部に櫛状直線文、列点文、波状文。内面指ナデ、指オサエ。接合痕がよく残る。	色調: 灰白色 7.5YR8/1 胎土: 1mm 大までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 (完) ~ 体肩部
53045 図17 図版十八	甕	TA (I)	SD5302	1層	口径: 14.0cm 残存高 2.7cm	外反する第1口縁から内傾気味に第2口縁を立ち上げる。	外面第2口縁列点文。頭部に櫛状直線文。	色調: 灰白色 7.5YR8/1 ~ 黒褐色 7.5YR3/1 胎土: 1mm 大の石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/3 ~ 頸部若干
53046 図17 図版十八	甕	TA (I)	SD5302	4a オレンジ	口径: 25.3cm 残存高: 3.6cm	外反する第1口縁から内傾する第2口縁を立ち上げる。	外面第1口縁縦ハケ。内面第1口縁横ハケ。	色調: 灰白色 10YR8/2 ~ 黒色 10YR1.7/1 胎土: 1mm 角までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部 1/4
53047 図17 図版十八	甕	TA (I)	SD5302	5a 青灰色	口径: 17.3cm 残存高: 2.7cm	外反する第1口縁から内傾する第2口縁を立ち上げる。	内面第1口縁強いナデ。	色調: 灰白色 7.5YR8/2 ~ 黒褐色 7.5YR3/1 胎土: 1mm 大の石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/5
53048 図17 図版十八	甕	TA (I)	SD5302	5a 青灰色	口径: 27.0cm 残存高: 4.9cm	緩やかに外反する第1口縁から内傾して第2口縁を立ち上げる。	第2口縁外面に斜ハケ。上半部に強いナデ。大1口縁内面細かい横ハケ。	色調: 灰褐色 5YR6/2 胎土: 微石粒を含む 焼成: 良好	口縁部 1/6

表7 出土土器観察表 (第53次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調 / 胎土 / 焼成	備考
53049 図 17 図版十八	甕	TA (I)	SD5202	5 層	口径 21.0cm 残存高 5.0cm	緩やかに外反した第1口縁から内傾する第2口縁を立ち上げる。	第2口縁外面斜めハケ。内面ナデ。	色調：明褐色 7.5YR7/2～黒色 7.5YR1.7/1 胎土：1mm 大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/8 弱
53050 図 17 図版十八	甕	TA (I)	SD5202	5a 青灰色	口径：21.6cm 残存高：4.7cm	外反する第1口縁やや外傾気味に第2口縁を立ち上げる。	外面第2口縁に列点文(?) 頸部に櫛描直線文。内面第1口縁横ハケ。	色調：灰褐色 7.5YR6/2 胎土：1mm 角までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/8 ～頸部若干
53051 図 17 図版十八	甕	TA (I)	SD5202	5 層	口径：16.0cm 残存高：4.5cm	外反した第1口縁から湾曲気味に第2口縁を立ち上げる。	外面第2口縁に斜ハケ。頸部に列点文と思われる。内面第1口縁に列点文。	色調：灰白色 10YR7/1 胎土：1mm 角までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/4 ～頸部
53052 図 17 図版十八	甕	TA (I)	SD5202	5 層	底径：5.0cm 残存高：3.8cm	平底	外面ハケ。内面ナデ。	色調：明褐色 5YR7/2 ～黒褐色 5YR2/1 胎土：1mm 大の石粒を含む 焼成：良好	底部完存
53053 図 17 図版十八	甕	TA (I)	SD5202	5 層	底径：5.0cm 残存高：3.5cm	平底	外面ハケ。内面ナデ、ケズリ。	色調：明褐色 7.5YR7/1 ～黒色 7.5YR2/1 胎土：1mm 大の石粒を含む 焼成：良好	底部完存
53054 図 17 図版十七	高坏	TA (I)	SD5202		脚底径：13.0cm 残存高 12.4cm	円筒形の脚柱部から裾部が「ハ」の字状に開く。端部は内外に肥厚し外傾する凹面を作る。	外面ハケ目の後すそ端部に沈線を廻らす。内面ナデ。シボリ痕	色調：明褐色 5YR7/2 胎土：まれに大粒の石粒を含む 焼成：良好	脚裾部 1/8 ～脚柱部 1/2
53055 図 17 図版十八	浅鉢	TA (I)	SD5303	5a 青灰色	口径：29.0cm 残存高 6.5cm	口縁部緩やかに屈曲し端部はやや外傾気味の面をなす。		色調：淡褐色 5YR8/4 胎土：1mm 大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/6 ～体部若干
53056 図 17 図版十八	壺	TA (I)	SD5303	3 層、 4 b	口径：20.0cm 残存高：6.1cm	外反気味の第1口縁から肥厚してやや内傾する第2口縁を立ち上げる。端部は水平な面。	外面第1口縁縦ハケ、横ハケ。第2口縁斜めハケの後ナデ。内面第1口縁縦、斜めハケ。第2口縁斜めハケ及び指ナデ。	色調：灰白色 10YR8/1 胎土：1mm 角までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部若干
53057 図 17 図版十八	壺	TA (I)	SD5303	腐植土層	口径：9.0cm 残存高：6.3cm	口縁部やや外上方に伸び端部はほぼ水平な面。	外面口縁端部に強い横ナデの後1条の沈線。体部にハケ目が見られる。内面指オサエ、ナデ。	色調：褐色 5YR6/6 ～にぶい黄褐色 10YR7/3 胎土：1.5mm 角までの石粒を含む 焼成：良好	口頸部 1/5
53058 図 17 図版十八	壺	TA (I)	SD5303	3a 層	口径：6.8cm 残存高：4.5cm	外上方に伸びる第1口縁から内湾気味に第2口縁を立ち上げる。	外面に波状文か。内面指オサエ、ナデ。	色調：灰白色 10YR7/1 胎土：1mm 角までの石粒を含む 焼成：良好	口頸部 1/7
53059 図 17 図版十八	甕	TA (I)	SD5303	3a 層、 2a 層	口径：29.0cm 残存高 3.8cm	大きく外反する第1口縁からやや内傾する第2口縁を立ち上げる。端部は内傾する面。	内面第1口縁端部に櫛描列点文を廻らす。	色調：黒褐色 10YR3/1 胎土：1.5mm 角までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部のみ 1/8

石製品 (53001s ～ 53004s)

出土した石製品について、実測したもの4点を図示した。53001s～53003sは溝状遺構から出土した。53002s・53003sは打製石鏃、53001sは磨製石剣の切っ先、破損品である。53004sは遺構検出時に遺構面から採取された石斧である。

表8 出土石製品観察表 (第53次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
53001s 図 18 図版十四	磨製石剣	TA (I)	SD5203	2 層	頁岩	29	24	6.2	4.14	両側縁を鋭利に研ぎだした磨製石剣の切っ先部分。
53002s 図 18 図版十四	打製石鏃	TA (I)	SD5201	4.5 層	サスカイト	27	20.8	6	3.11	平基式打製石鏃。
53003s 図 18 図版十四	打製石鏃	TA (I)	SD5201	上面	サスカイト	32.4	12.4	5.3	2.15	
53004s 図 18 図版十三	磨製石斧	TB (I)	遺構面			167	56.5	35	541.8	表面には自然面を残した両刃石斧で、外湾する刃部を研ぎだし、両側縁には敲打痕を多数残している。

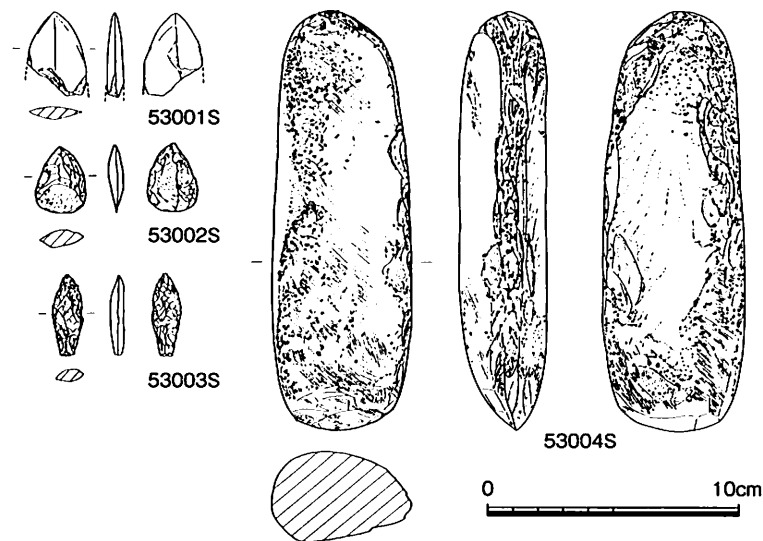


図 19 第 53 次調査出土遺物実測図

(8) 小結

第 53 次調査では、集落の東側の環濠周回位置と埋没時期の把握を主要目的にしていたが、予想どおりに調査区を縦断する状態で 3 条の環濠が検出された。3 条の環濠については、それぞれ土層観察ベルトを設け堆積状態と遺物出土状況の把握を行なった。その結果、最も内側に位置する SD5301 については、環濠開削後かなり長期間におよんで水が張られている「水濠」の様子がうかがえ、その後、少なくとも 2 度、環濠内を水が流れ土砂が運ばれたことと、周辺からの崩落土の堆積を確認した。崩落土の解釈については、明言しえないが、環濠の内側に土塁が存在する可能性を指摘した。環濠の存続時期については、出土土器の観察から最も古い様相を示すものが、SD5301 の下層から出土している。その時期は、近江に凹線文の土器製作技法が入ってくる直前のもので近畿第Ⅳ様式の初頭に位置づけられる。SD5302 については、在地系の受口状口縁甕の製作手法上、新相に位置づけられるものが SD5301 よりも比較的に増えており、SD5303 については、その傾向がさらに顕著のように認められた。SD5301 は、出土した土器の様相から集落域をとり囲む他地点の第 1 環濠（内濠）と、時期的に類似する埋没の経過を経たものと考えられる。また、一部を断ち割りし、土層を観察した結果、環濠埋没土中には、土器や木製品をはじめ動物、植物、昆虫など自然遺体を大量に包含する土層が確認された。これらの遺構・遺物は下之郷遺跡の誕生から衰退にかけての歴史の変遷を明らかにするうえで、また弥生時代の環境や生業復原を進めるうえでは重要な位置を占めるものと考えられる。

3. 第 54 次調査の成果

- (1) 調 査 地 守山市下之郷三丁目
字皆広 643-1 番地
- (2) 調 査 期 間 平成 15 年 12 月 16 日
～ 16 年 2 月 25 日
- (3) 調 査 面 積 約 400m²
- (4) 担 当 者 川畑 和 弘
- (5) 調査経緯と方法

第 54 次の調査は、環濠集落の南西側に位置し、環濠が周回していることが予測される場所である。下之郷遺跡の史跡指定は 3 条の環濠が周回する範囲を基本としている。近年、この近辺で開発にかかる協議が増加しているため、遺構保護と指定に向けた重要遺跡範囲確認調査を実施することとした。調査期間は、隣接する土地（53 次調査：字皆広 643-1 番地）の調査と並行して進めるように行った。遺構検出には、表層土（耕土）の除去に重機（バックホー 0.4m²）を利用し、その後、人力による遺構面精査を行った。遺構が検出されるのは、表土より約 30 cm 下に位置する黄灰色極細砂質シルト土をベースとした土層上面である。

遺構調査は、表土除去し遺構を平面で検出した後、溝の一部を断ち割り、断面観察で溝の埋没状態を観察した後に、写真撮影、平板測量（1/50 縮尺）の平面図を作成し、その後、埋め戻し旧状（地下保存）に還した。

(6) 検出遺構

遺構検出は、現耕作土の直下約 30cm にある黄灰色極細砂質シルト土の上面で行なった。遺構の種類では溝状遺構が検出されたが、環濠の内部空間で見られるような柱穴の密集状況は確認されなかった。

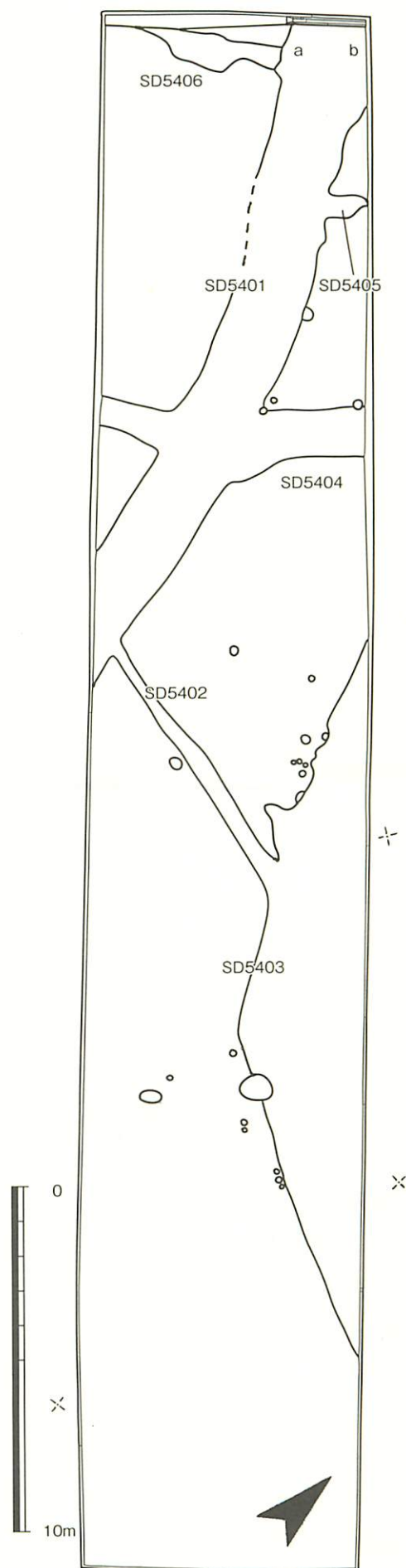


図 20 第 54 次調査全体図

SD5401

SD5401 は、調査区南辺中位から北西隅に向けて検出された溝で幅約 2 m、深さ約 60cm を測る。断面形状は逆台形状を呈している。隣の調査地で検出された溝（SD5303）に寄り添うように、その外側約 5 m の位置を並走するように掘られている。また、3 本の小溝（SD5402・5404・5405）が枝溝のように延びて SD5403 (=SD5303) に取り付いている。溝を埋めている土砂は中位までがシルト質土で、それより下の溝底には砂質土が堆積しており、流水によりこれらの砂が運ばれてきたものと判断され、集落を取り巻く 3 条の環濠の堆積状態とは全く異質な状況である。

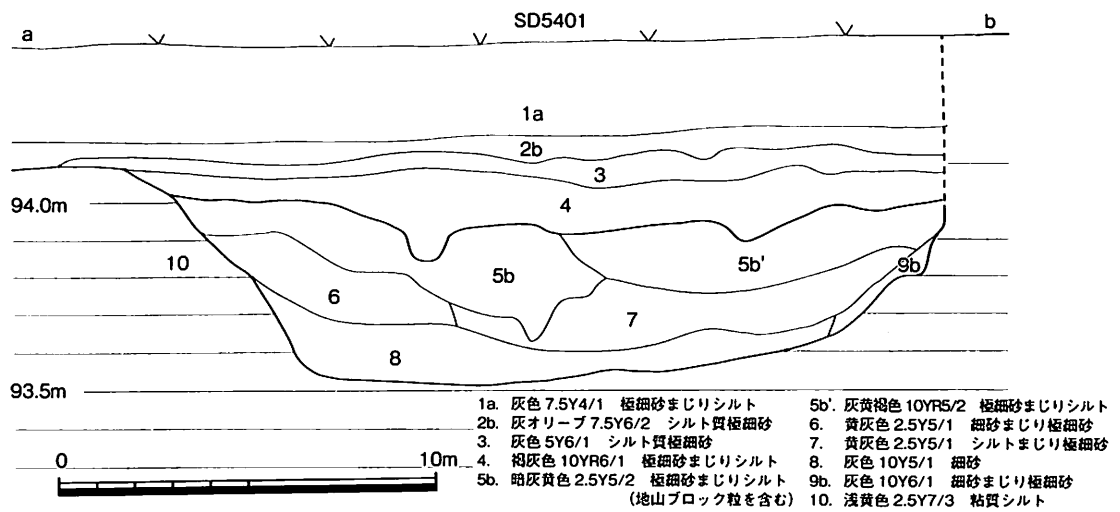


図 21 第 54 次調査検出遺構断面図

SD5402

SD5401 から SD5403 に向けて掘られた小溝で幅約 50cm 程度を測る。未掘削であるため、断面形状や深さは不明である。検出面での色調土質は、褐色系のシルト質土である。

SD5403 (第 3 環濠)

調査区北辺の東隅で検出された溝の南岸で、対岸は隣地の第 53 次調査地で検出されている。幅は、約 5 m、深さは 1.4 m を測る。集落を取り囲む 3 条環濠の最も外側の溝にあたるものである。検出面での色調土質は、褐色系のシルト質土である。

SD5404

SD5401 から SD5403 に向けて掘られた溝で、幅約 150cm を測る。未掘削であるため、断面形状や深さは不明である。

SD5405

SD5401 から SD5403 に向けて掘られた溝で、幅約 60cm を測る。未掘削であるため、断面形状や深さは不明である。

SD5406

SD5401 から集落外方向（南西）に向けて掘られた小溝で、幅約 50cm、深さ 20cm 程度、断面形状は緩やかな U 字形をしている。

(7) 出土遺物

今回の調査では、掘削調査をほとんど行っていないため、検出面や一部遺構の断ち割り部分から若干の遺物が出土したのみである。

石製品 (54001s)

出土した石製品について、実測したもの1点を図示した。遺構検出時に遺構面から採取されたものである。54001sは打製石鏃である。

表9 出土石製品観察表 (第54次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
54001s 図21 図版十四	打製石鏃	TB(1)	遺構面			32.9	24.7	3.9	2.4	

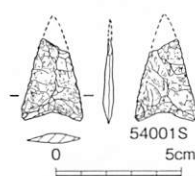


図22 第54次調査出土遺物実測図

(8) 小結

今回の調査地からは、集落を取り巻く3条環濠のうち一番外側の環濠の一部と、さらにその外側に掘られた溝(SD5401)が1条検出された。この溝(SD5401)は、『報告書Ⅱ』第33次調査で報告したSD-4と内容が合致しており、この溝が流下して第33次地点のSD-4に繋がるものと考えられる。第33次の報告文では、SD-4は、SD-3とセット関係にあり、環濠への取水溝であり、水位調整用の役割を果たしていたことを記したが、今回の調査で検出したSD5401についても、この解釈の枠内で考えられるものと判断している。



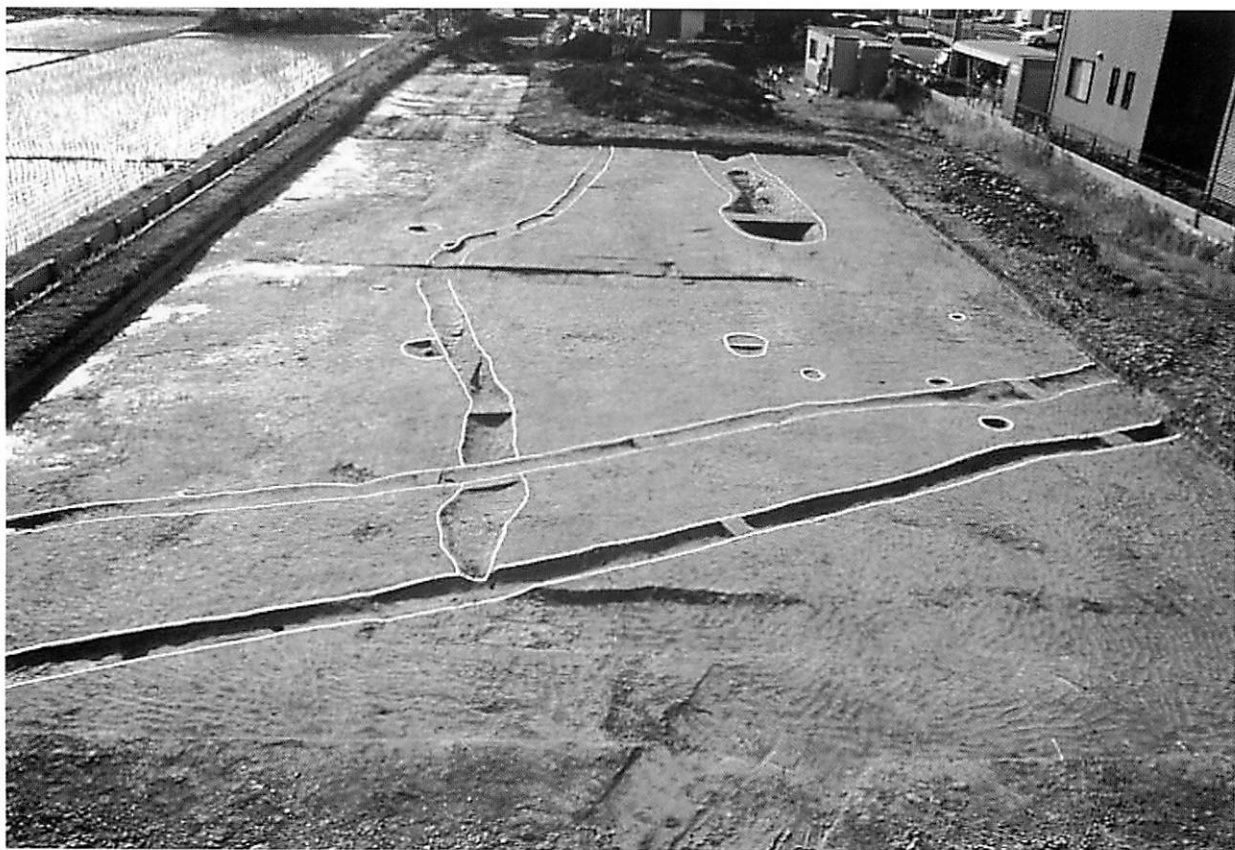
図 23 第 53 次調査周辺調査成果図（本文参考図）



第52次調査 遺構検出状況（西より）



第52次調査 遺構検出状況（北西より）



第52次調査 遺構検出状況（南東より）



SD5201（北西より）



SX5201 (南より)



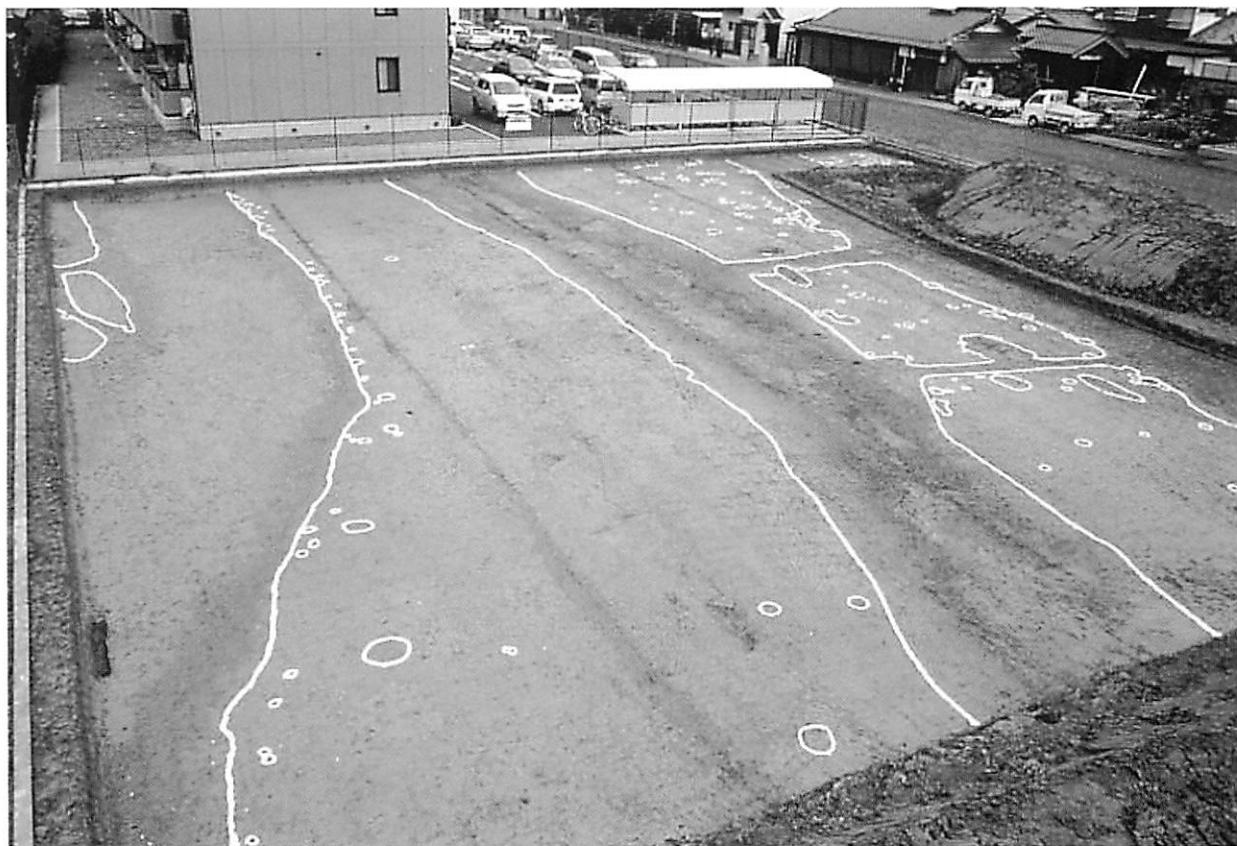
SD5201 断割り状況



SX5201 南側周溝 (SD5208) 調査状況 (南より)



SX5201 南側周溝 (SD5208) 完堀状況 (北西より)



第53次調査（TA 地区）調査地全景（南より）



第53次調査（TA 地区）調査状況（東より）



第53次調査（TB地区）平面検出状況（南西より）



SD5301 断割り状況



SD5302 断割り状況



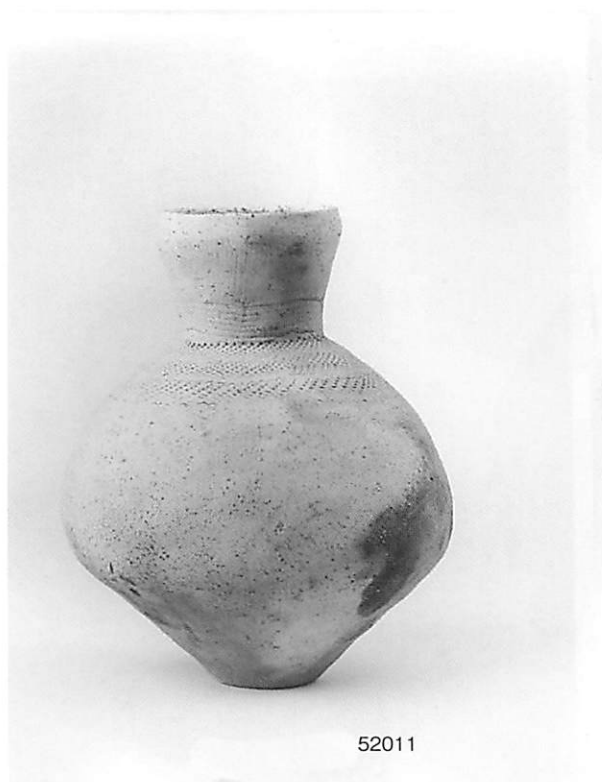
SD5303 断割り状況



第54次調査 平面検出状況（北より）



第54次調査 平面検出状況（南東より）

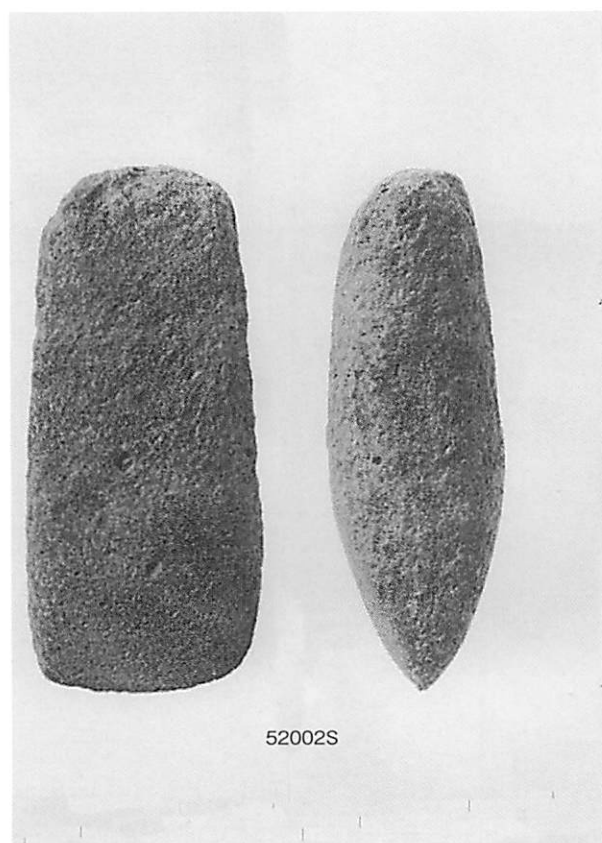


52011

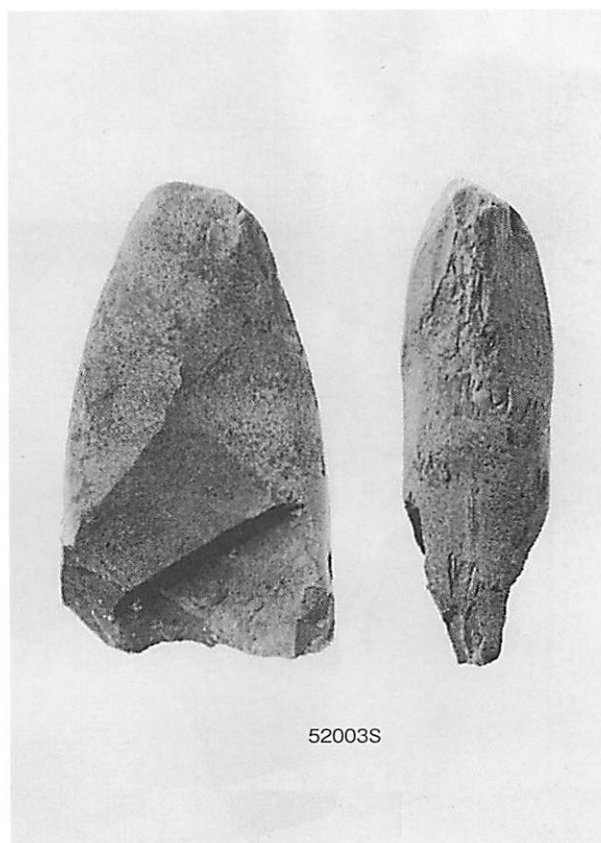


52012

第 52 次調査出土土器



52002S



52003S

第 52 次調査出土石製品



52006



52007

第 52 次調査出土土器



52013



52014

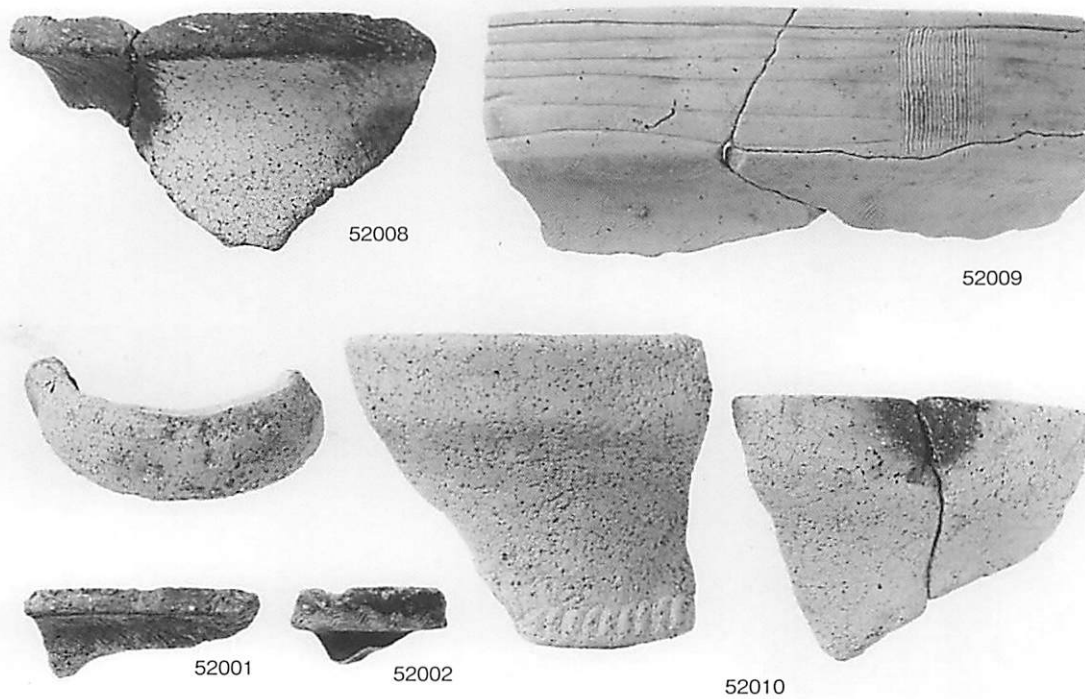


52016

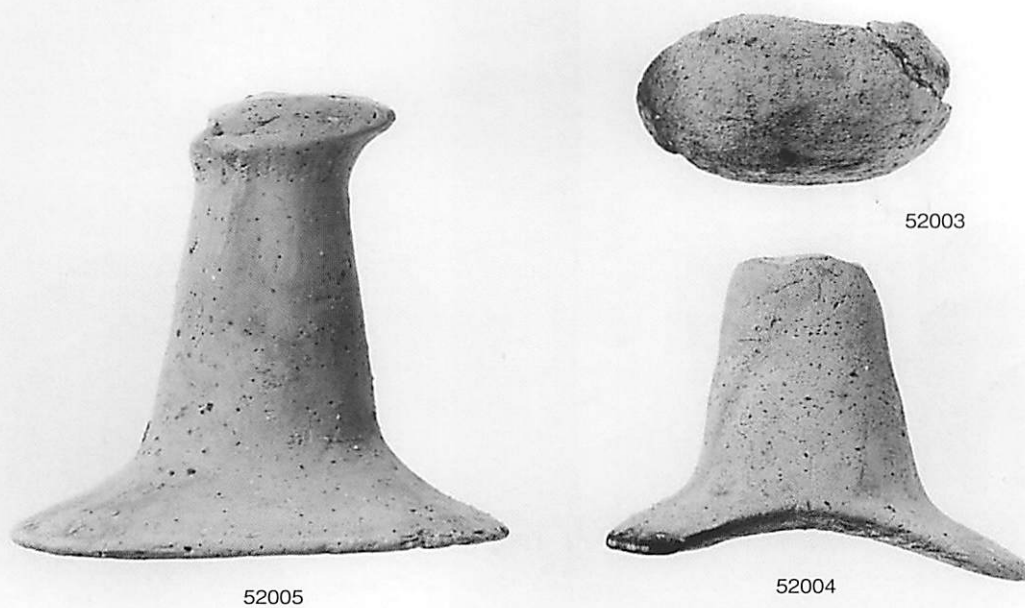


52015

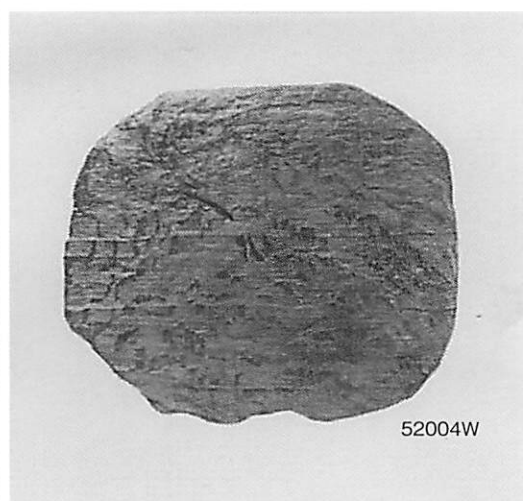
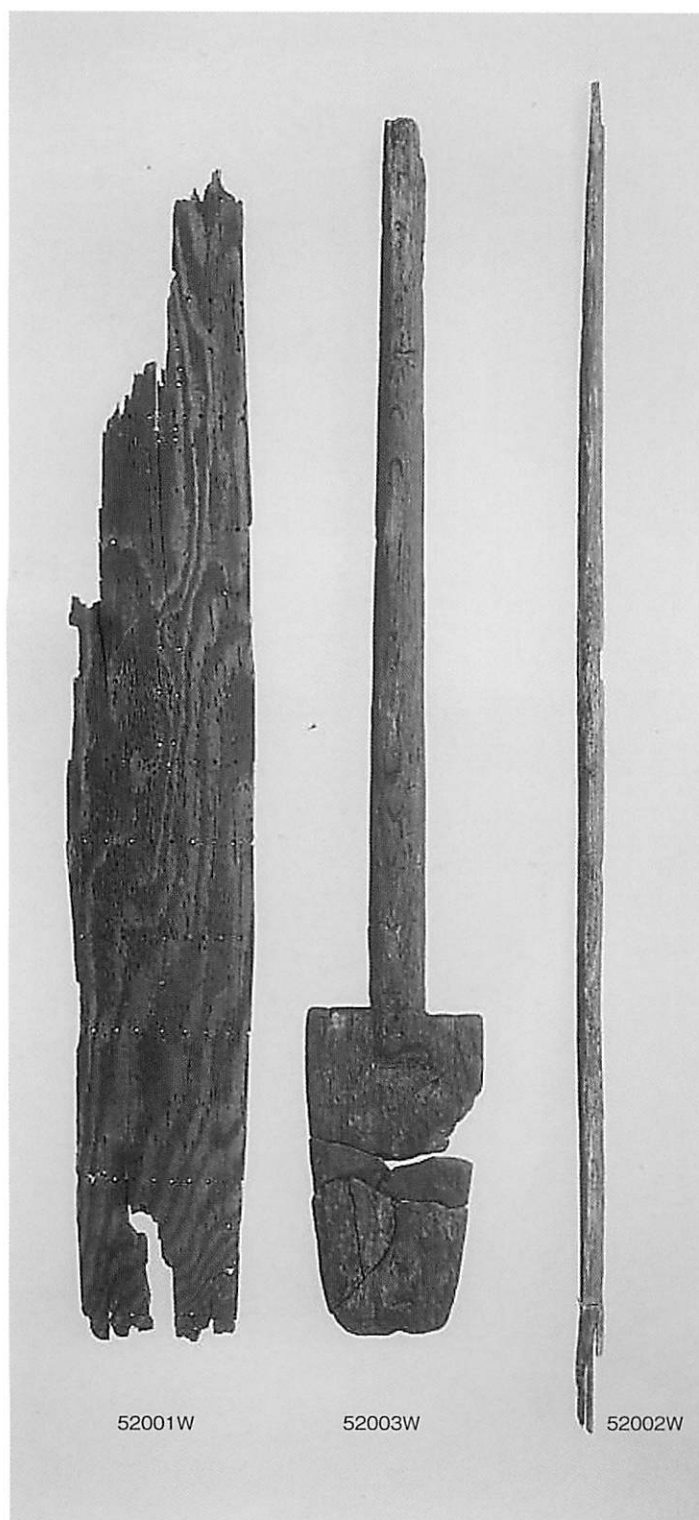
第 52 次調査出土土器



第 52 次調査出土土器



第 52 次調査出土土器



第 52 次調査出土木製品



53041



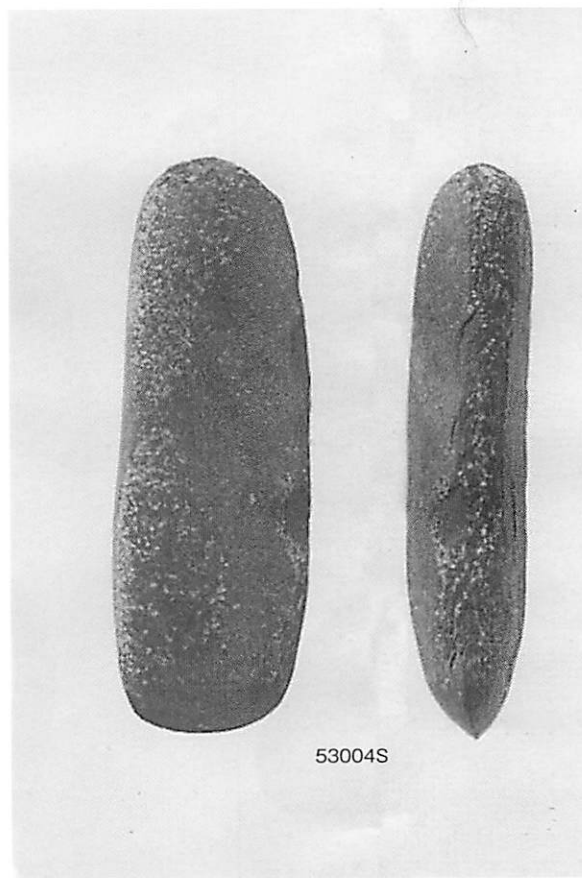
53025

第 53 次調査出土土器



53033

第 53 次調査出土土器

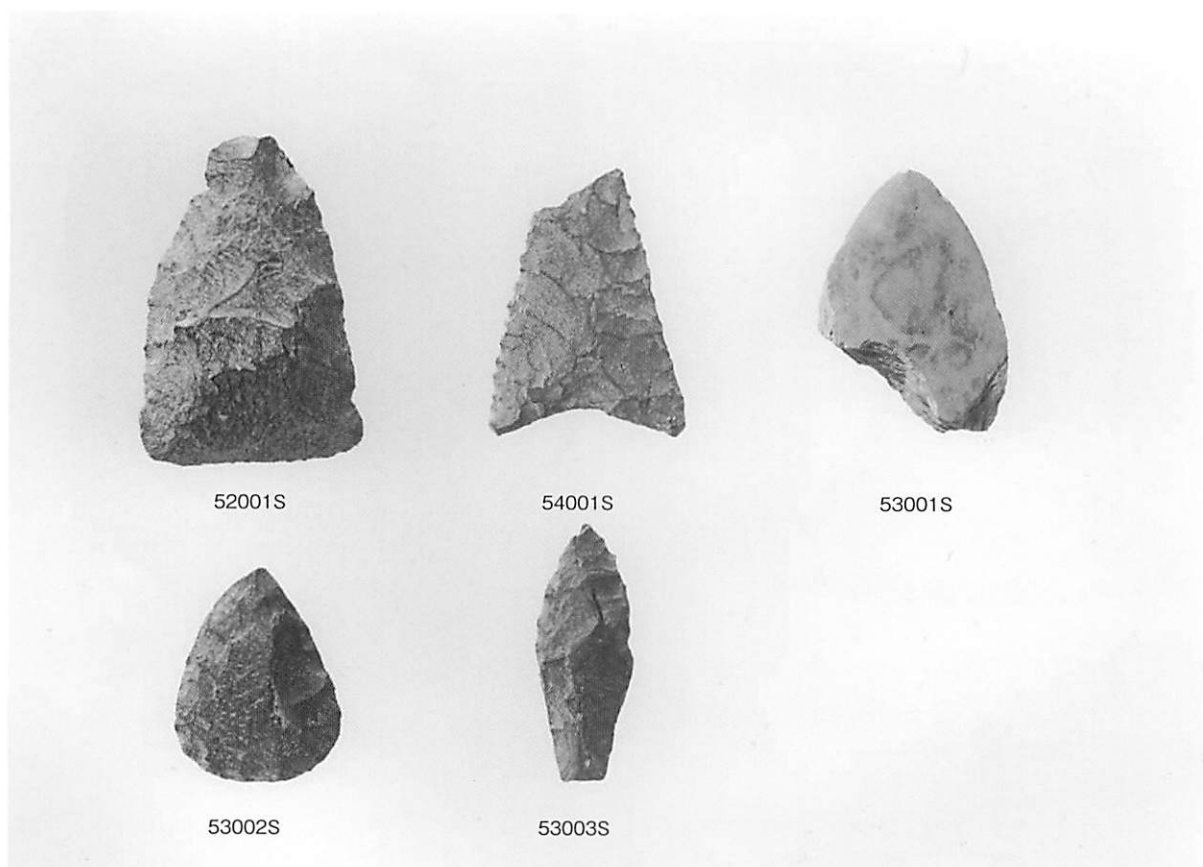


53004S

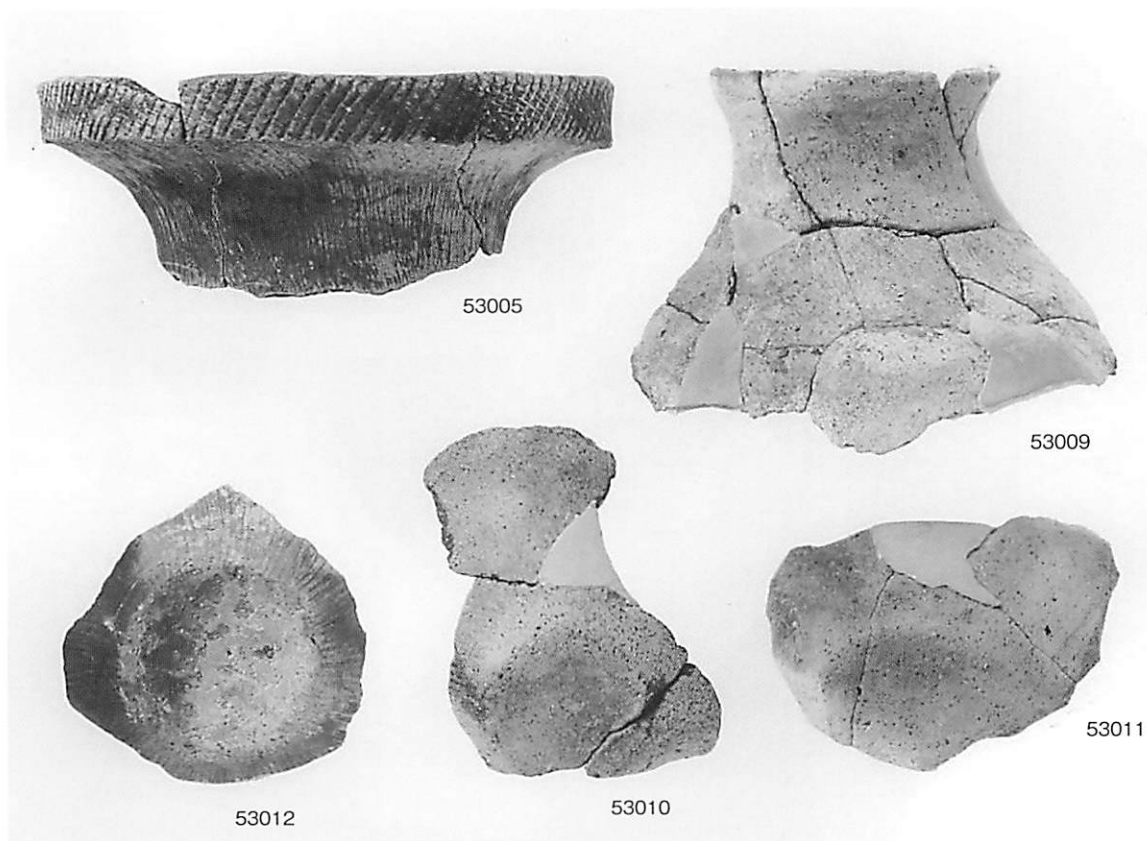
第 53 次調査出土石製品



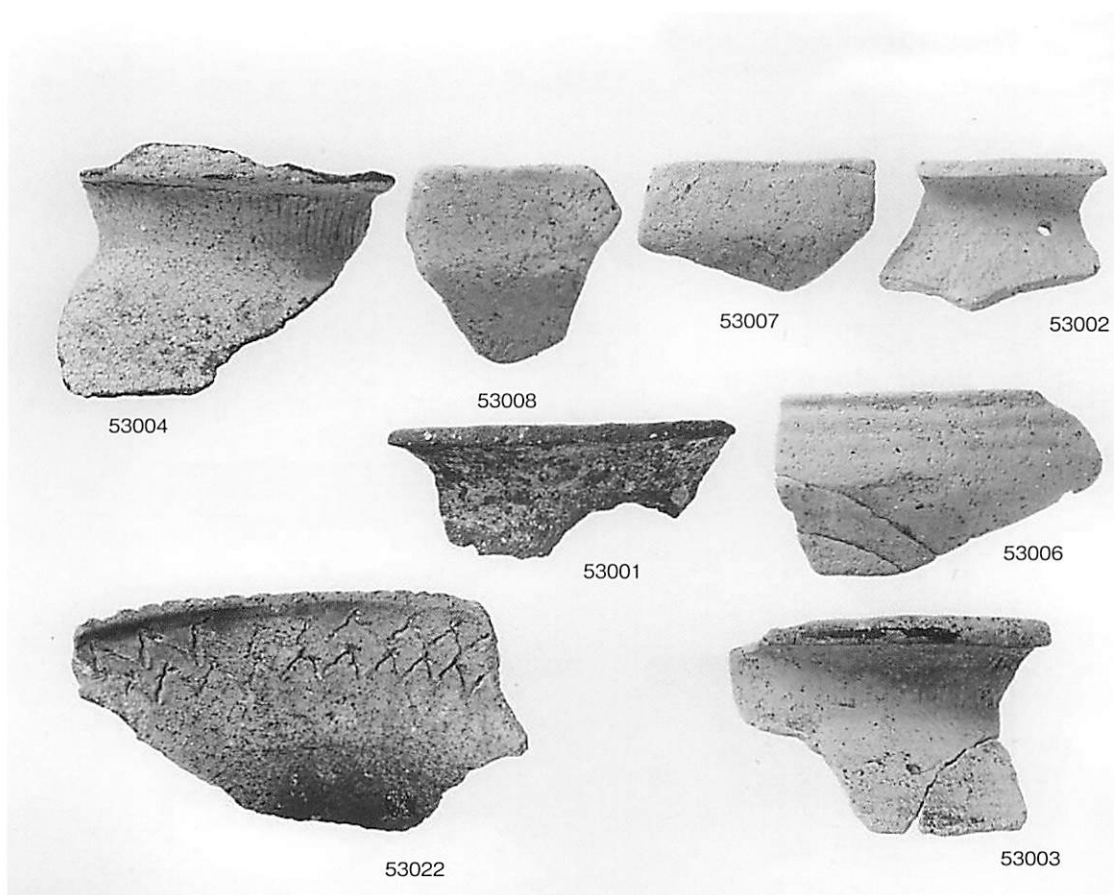
第53次調査出土土器



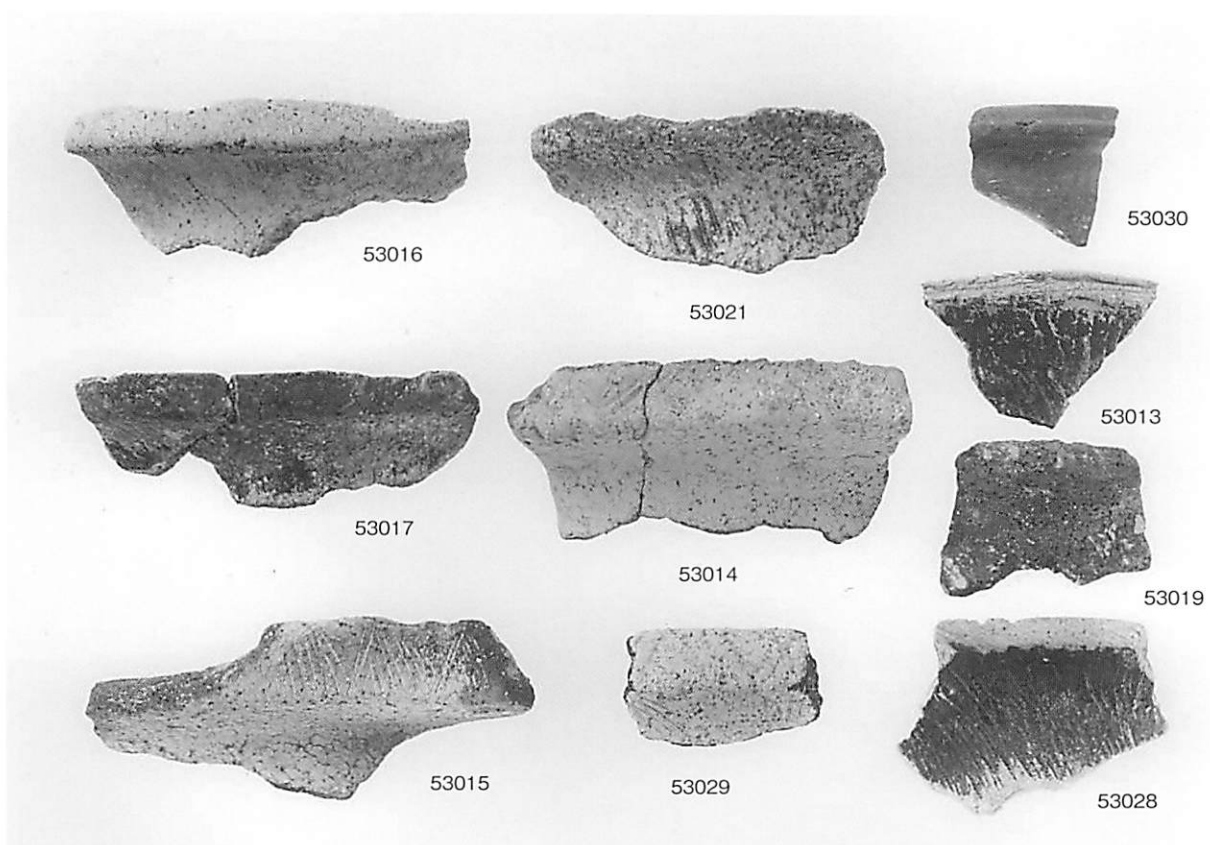
第52・53・54次調査出土石製品



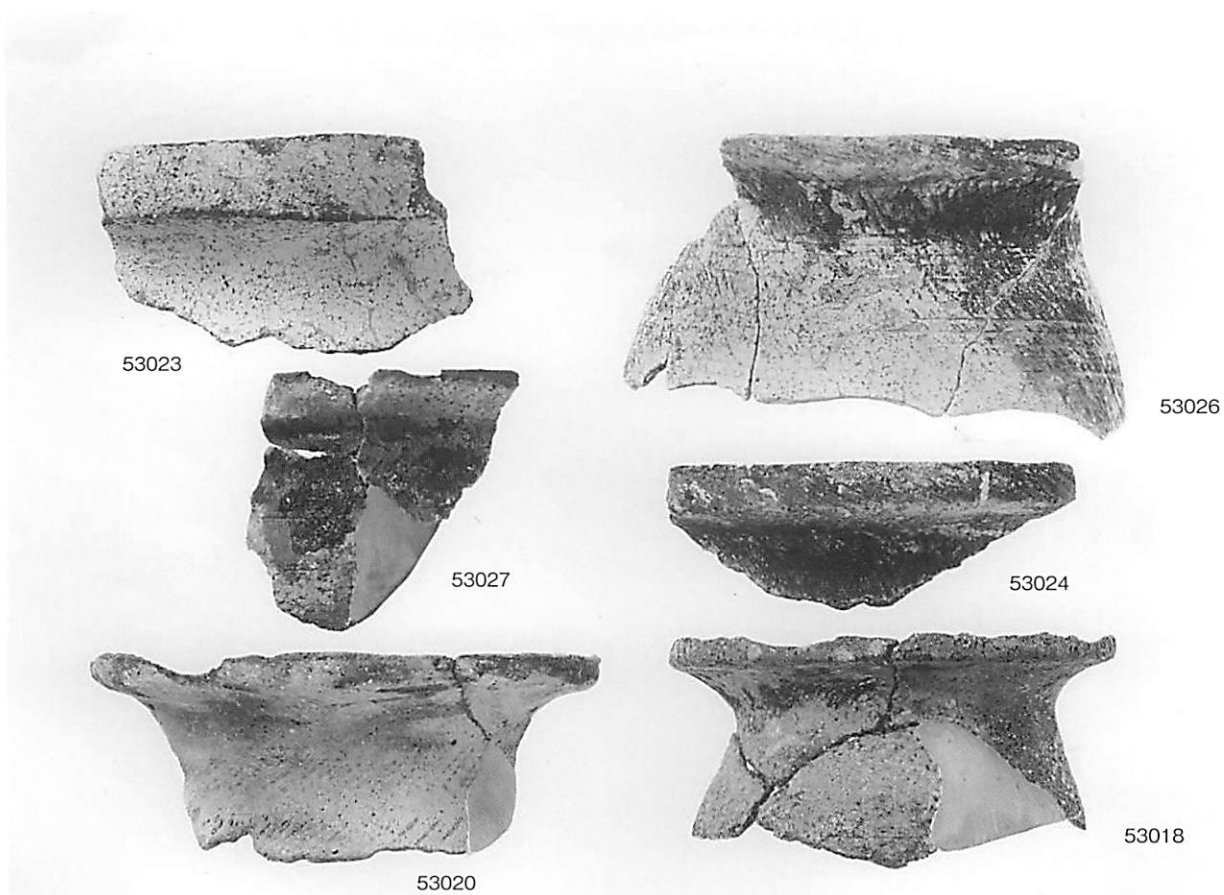
第 53 次調査出土土器



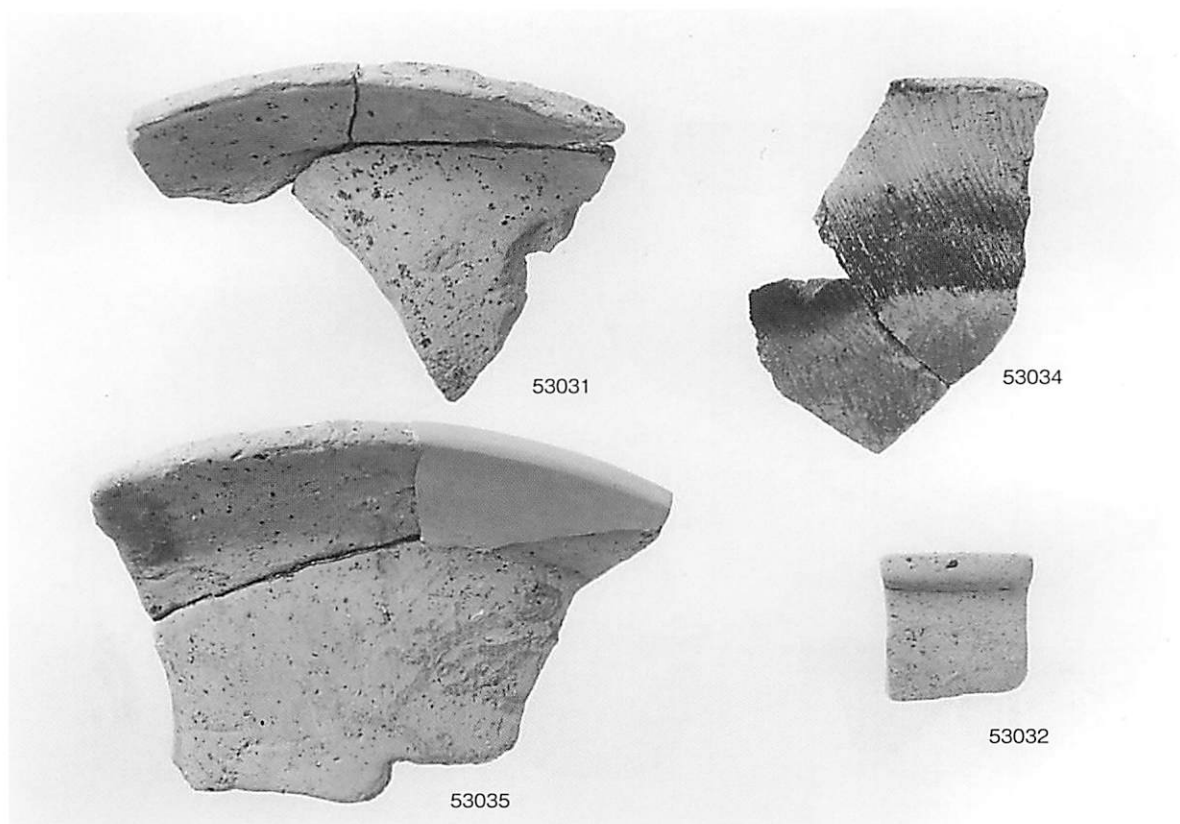
第 53 次調査出土土器



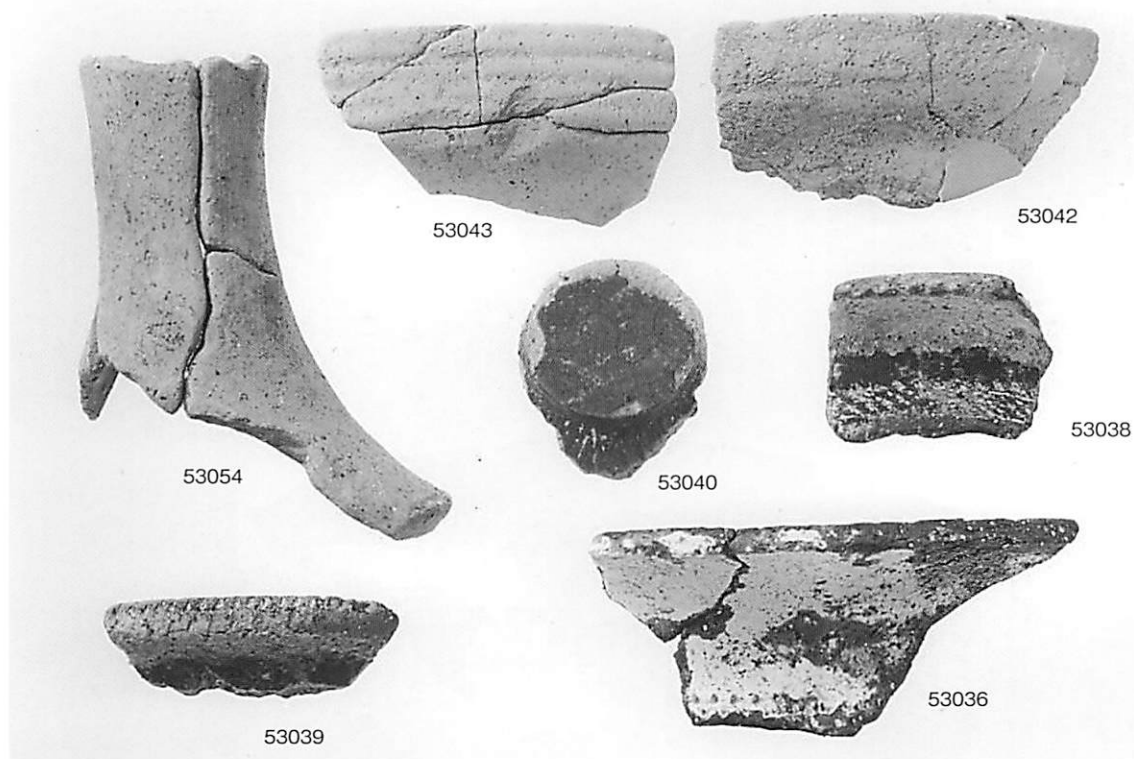
第 53 次調査出土土器



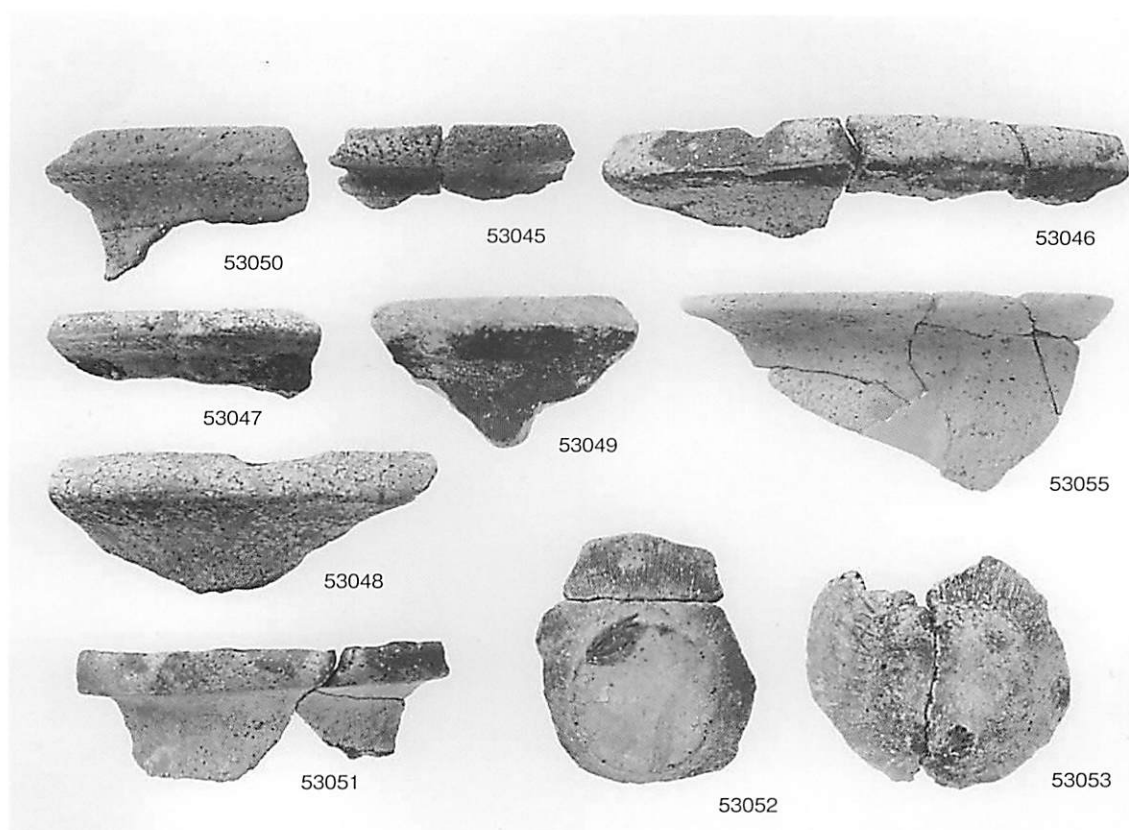
第 53 次調査出土土器



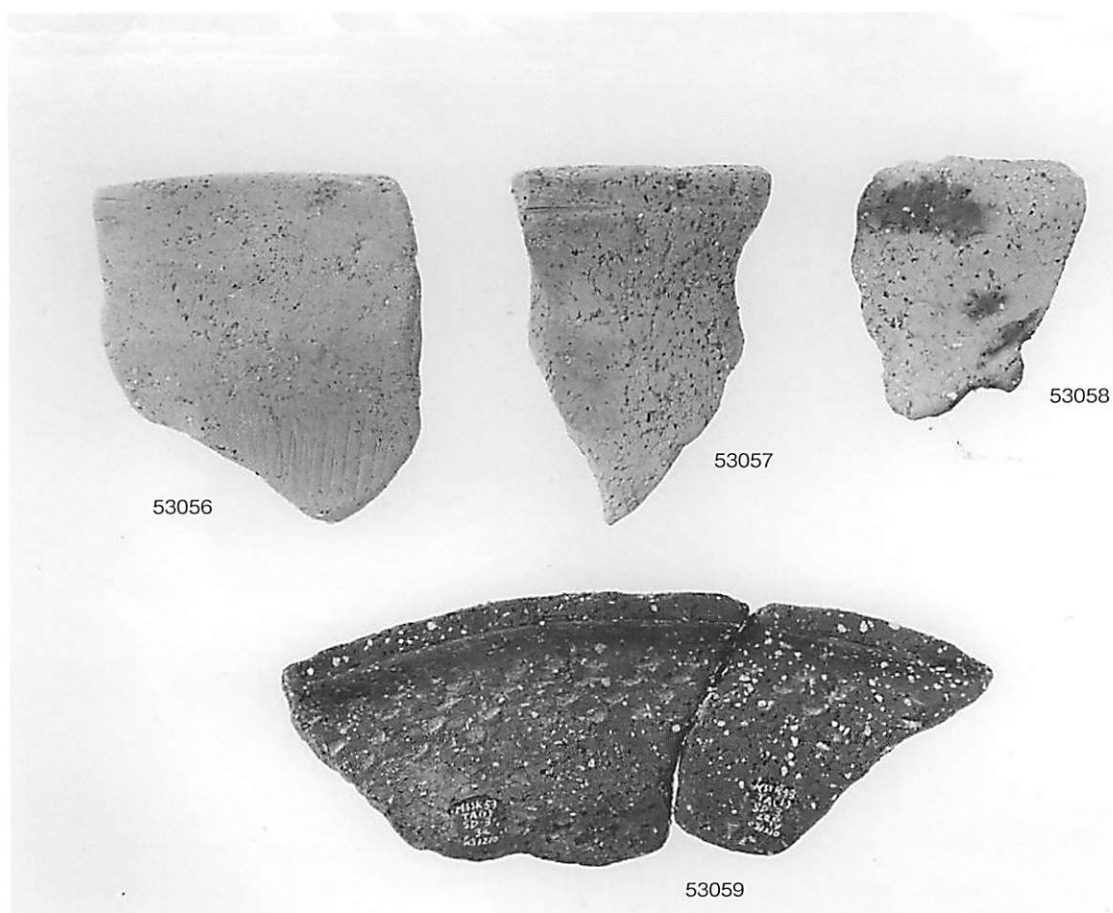
第53次調査出土土器



第53次調査出土土器



第 53 次調査出土土器



第 53 次調査出土土器

報告書抄録

フリガナ	シモノゴウイセキカクニンチョウサホウコクシヨ VI							
書名	下之郷遺跡確認調査報告書 VI							
副書名	第52・53・54次調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	川畑 和弘							
編集機関	守山市教育委員会							
所在地	〒524-8585 滋賀県守山市吉身二丁目5番22号 TEL 077-582-1156							
発行年月日	平成22年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下之郷遺跡 (第52次)	滋賀県守山市下之郷三丁目字上門田546-1番地他	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2003年5月16日 ～7月28日	約1,090	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第53次)	滋賀県守山市下之郷三丁目字皆広640-1番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2003年11月19日 ～2004年2月13日	約1,000	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第54次)	滋賀県守山市下之郷三丁目字皆広643-1番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2003年12月16日 ～2004年2月25日	約400	重要遺跡 範囲確認
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
下之郷遺跡 (第52次)	集落	弥生		大溝、方形周溝墓		弥生土器、磨製石器、 打製石器、木製品		宅地造成工事 / 重要 遺跡確認調査
下之郷遺跡 (第53次)	集落	弥生		環濠		弥生土器、石器		重要遺跡確認調査
下之郷遺跡 (第54次)	集落	弥生		環濠		打製石器		重要遺跡確認調査

下之郷遺跡確認調査報告書 VI

—第 52・53・54 次調査報告書—

発 行 日 平成 22 年 (2010) 3 月

編集・発行 守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号

印 刷 株式会社 スマイ印刷工業